W245
20

江戸名所図会

十九

300169-019-1

W245-20

江戸名所図会　7巻

斎藤長秋／編，長谷川雪旦／画

20冊

1893．12

ADC-0019

W245
20

三園稲荷社　小梅村田の中にあり　別當は天台宗延命寺と
号し神像は弘法大師の作なり　同大師の勧請なりと文和
年間三井寺の源慶僧都再興せしと慶長の頃近江の住人
なりし成後此地に移せしを當社の内陣に奥一蝶の畫ける牛若丸と
辨慶の半身の圖を掲たるを
五元集　牛嶋あたりの神前まで酒を呑する

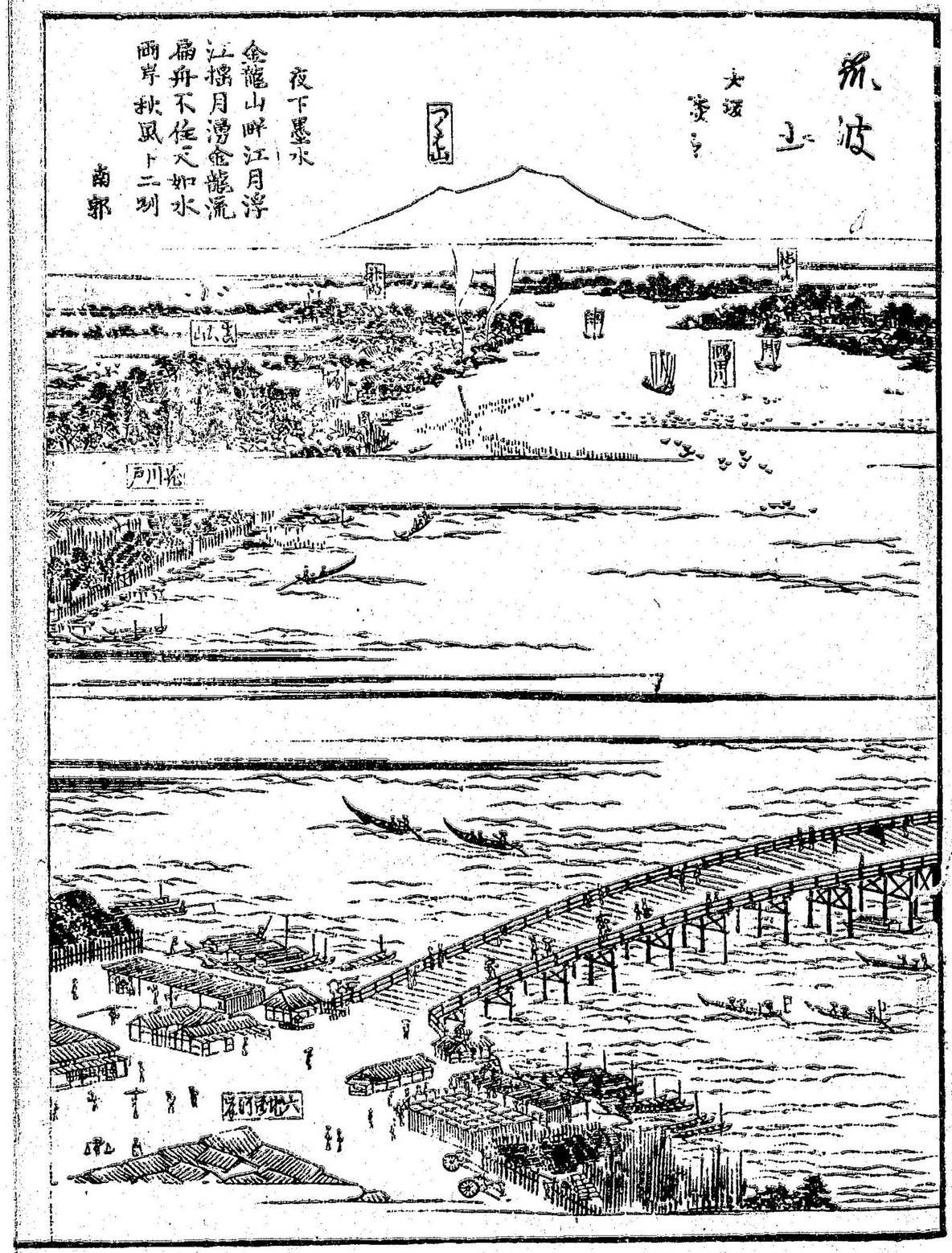
夕立や田をへだての社より

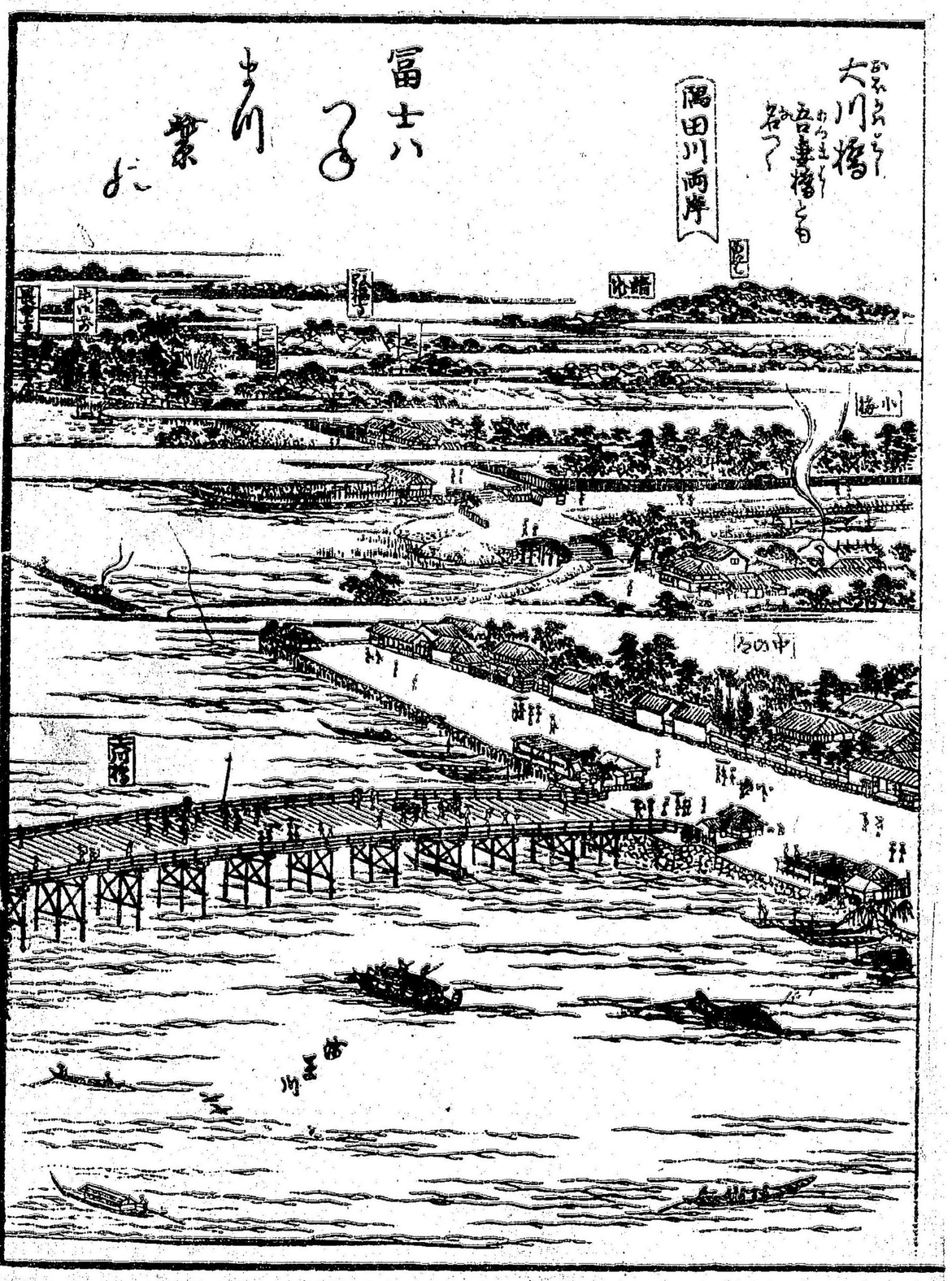
雪晴
其角

牛御前王子權現社　同所北の方にあり　別當は最勝寺と号し牛嶋の
總鎮守なり　祭禮は陽年九月十二日北本所石原新町の旅所へ神
幸ありて同十五日に帰輿を祭神素盞嗚尊　牛頭前　清和天皇第七

寄贈
西村妙子殿

56.10.-5
81W51792

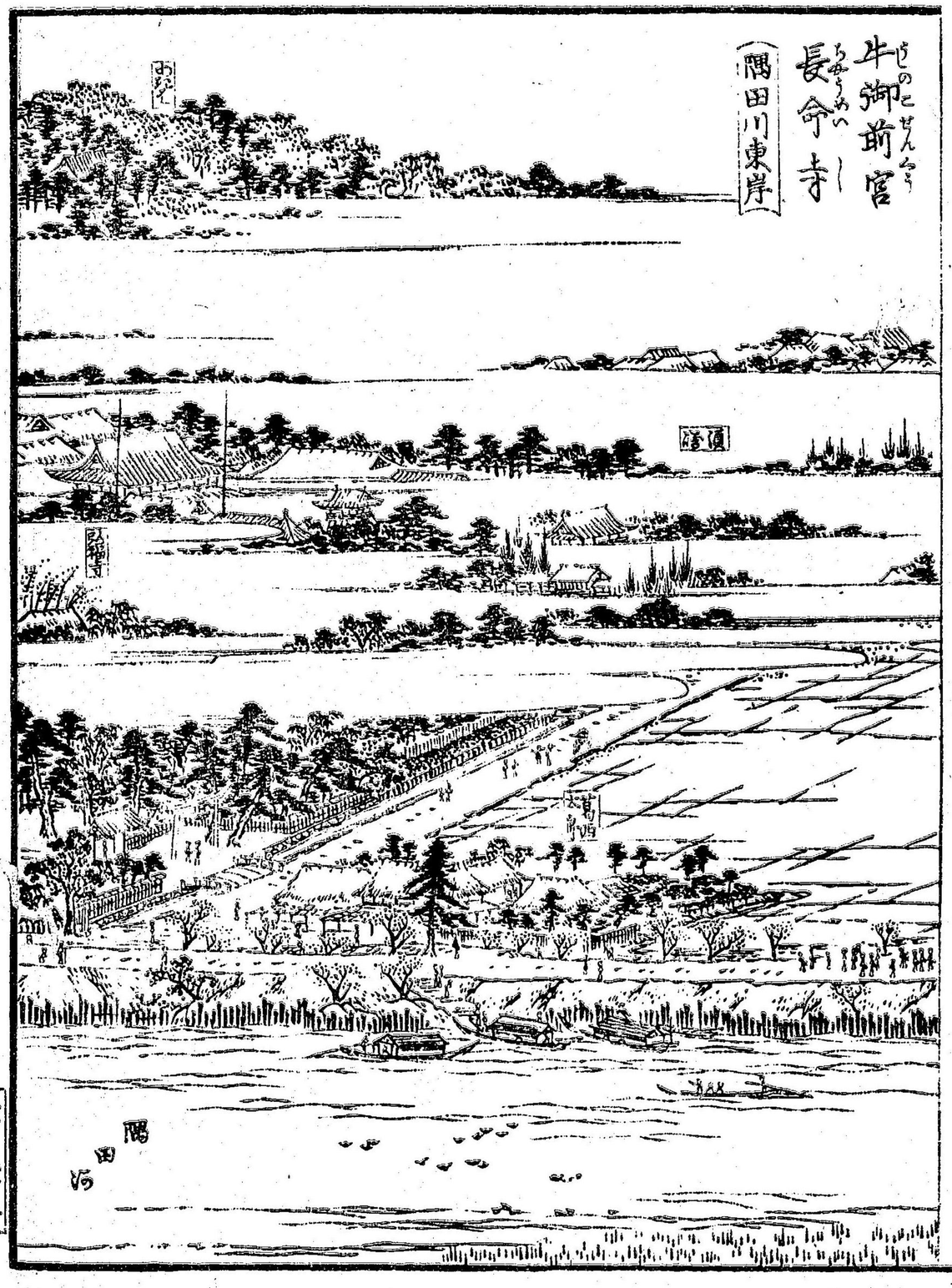

夜下墨水
金龍山畔江月浮
江搖月湧金龍流
扁舟不住天如水
兩岸秋風卜二則
南郭
大坂
つくだ山
戸川花


富士
大川橋
吾妻橋ともいふ
隅田川両岸
小梅
中の

三圍稲荷社

元禄の頃当社の境内より一老嫗のり発掘の仏像をこゝろ喰ひこの老嫗田面より少ひ拘掌大一つの腕りくくともあり是を食ひ老嫗世よりとよりとよりとよ

牛御前宮
長命寺
隅田川東岸



皇まし王ま權現と称ふ二座なり相傳清和天皇の御宇貞觀二年庚辰秋九月慈覺大師東國弘法の頃素盞烏尊住寺の老翁と化現し此地よ跡を垂永く國家を守護らんと告ありし仍大師一社を奉上足の良本門閣梨を留て是殊勝らしむ（社の本地佛は日光薬陽成院の御宇清和帝等七の皇子當國よ迁されたまふ天慶元年丁酉九月十五日此地よ發足して覺しめの依岡山良本門閣梨こゝ小菴を奉平御前の相殿よ合祭り奉るとぞ（其後亜里王ありこゝ云く素盞嗚尊第二の御子

（牛嶋の出嶼そもそもこゝ牛嶋の出嶼といふ或人云當社を牛法前と称ふもいらすこゝを後世誤りて牛法嶼と唱へたりしまうんを後世誤りて嶼を書あらたむるそれを御前と称ふ

故よ摂列稱田御嶼祇前憧御嶼祇其余相列の二嶼大江戸の月岬等をへて海よ臨める北のかた今當社の辺を須崎村と名はるもいとゝ多くありこゝ海辺のおもむきよりて其頃いまもの例ふ作りたりしとも平を歴て堂比しこゝ次の嶼嶼蓮華寺の条やよはまひちゝうりはゝ茶やをあらゆる物ふ多くありこゝ海の浜を埋めたる此ゝ個宅の裏を南とゝ崎の文字を前くされと神号よ依前と称すりの又人のうくまも風ひたりこゝ往く其例ありこゝとも故よされを略と

法華経千部供養碑今内陣ニ収メアリ長三尺三寸ヨリ稍小キ

碑陰銘曰

奉造立釋迦像一軀

貞観十七丁未天三月日

法華十部

法華三昧院

此寺ハ往古当社境内ノ北中ヨリ高湯ノ湧出ル所ニ建立ノ堂ニテ今本殿ノ中ニ収ムル青石ニテ其質ヨリテ作リシ釋迦未ノ容ヲ刻シ一碑陰ハ直塔ニテ一堅ノ碑ニ往昔当社境内ノ北中ヨリ高湯湧出ル所ニ建立ノ堂ニテ今本殿ノ中ニ収ムル青石ニテ其質ヨリテ作リシ釋迦未ノ容ヲ刻シ一碑陰ハ直塔ニテ一堅ノ碑面ニ上下廻縁ヲ全ラセ碑面ニ立像ノ鮮明ナル文字ヲ鐫リ付ケシ事モ古ク数百年ヲ経タルヲ以テ観筆ノ貞観ト別当最勝寺ノ建立ノ年号トヲ考ヘ合スルニ貞観ハ清和帝ノ御宇ニシテ武蔵上総下総ノ国府ニ奉命ヲ以テ入部セラレシ事ハ国府五郎源道同次郎源道頼等ノ名アリ源道ハ常陸ノ同胞ニテ母ハ秩父ノ重弘ノ女ニテ十葉五郎源道旗一流

長三尺一寸三分

幅一尺九分

旁幅九分

国分二尺

十葉五郎平朝臣源道

同添状壹通

其文ニ当社ハ往古先祖千葉家再興ノ宮社ニテ依テ奥ヲ叙ルヨシ慶長十八年九月十五日国分宗太郎正勝奉行トアリ

梶原景季書

石橋山合戦ノ時分捕ノ面々書載ノ通リ見参ニ備ヘ申ヘキ旨ニ付テ如件

壮三目景季

小田原北条家神領寄附状壹通

其文ニ当社ハ往古ヨリ神領ノ由ニテ天正十八年ノ小田原北条家ノ没収ニ逢ヒシ分ヲ復旧ノ御朱印ヲ以テ寄附アリシ事ヲ記セリ

当社往古鎌倉右府将軍頼朝卿崇敬厚ク養和元年辛丑宮社ヲ経営アリシ以来代々ノ国主ノ尊敬アリシ事ヲ記シ其頃当国ノ主タルヨリ許多ノ田園ヲ寄附シ奉ラルル信ヲ厚クアリシトノリ然ルニ永禄ノ比ヨリ北條氏直老ヒタル道寺景秀ノ小命ニ先規ノ例ヲ以テ神領寄附アリ則社前ノ水田是ナリ

寶壽山長命寺　遍照院ト号ス天台宗東叡山ニ属セリ本尊ハ等身ノ釋迦如来脇士ハ文殊普賢般若十六善神等ノ像ヲ安ス牛堂ノ後ノ方ニ延壽堆堂前ニアリ

鳴辨財天傳教大師ノ作ナリ長命水門ノ一ノ般若水ナリ

柳樹堂ノ左ノ方ニアリ若木ノ枝ヲ挿シ置キシニ今ハ大木トナレリ

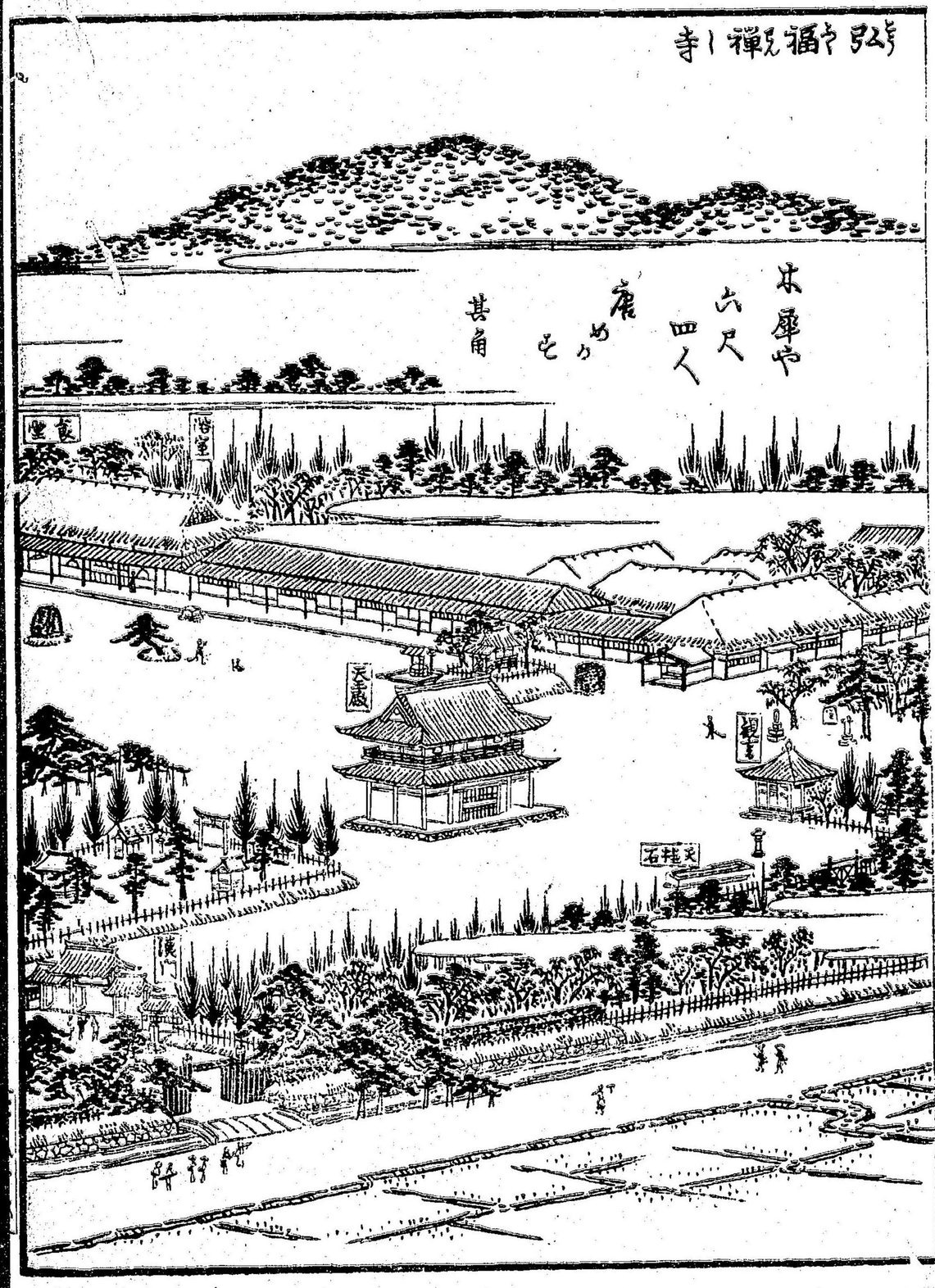
自在庵舊址堂ノ右竹林ノ中ニアリ芭蕉ノ句ヲ記シタル碑ヲ建テアリ

いさ子らハ雪見よころの中ころも

そもや

當寺昔八いさらの庵室なりし寛永年間　大樹御遊猟の砌屢〻御不豫
小おらせられしより此寺内よ体らせたまひ庭前の井の水をもて御薬を煑
ゆへ小須史ゝして常小るらせゆひしより此井よ長命水の号を揚りし
寺の号をも改むへし尓　台命ありて未長命寺と称とぞ　昔の常泉寺
殊更當ち八雪の名呼みて前よ隅田汀の流をうけて風色ことに
牛頭山弘福禅寺　牛御前宮の東よ隣る此辺を須崎とのへとる
難ゐ尸花山藏牛和尚延寶紀元癸丑創造す毎歳七月十五日大施餓鬼修行有
の禅室ゟ洛陽萬福寺を摸と本尊八唐佛の釋迦如来左右八迦葉
佛殿　額二鼈の字根ゟ掘ゟ隠えの筆
聯　同　左右の柱よ掲る高泉の筆ゟ
大雄殿　大成徳　聯　左右の柱よ掲る木庵の筆ゟ
平地雲雷音霊林木香華葉
見相傾身敬保未曾有也和
拝金布地自然海界黄金

左右ゟ分ち
聯　佛殿の前の左右
慈航堂　聯　左右の柱よ掲る戯牛筆
牌堂　堂禅堂の北ゟ東ゟを廻ゟ
聯　堂の背の窓ゟ掲る南岳隠山の筆
開山堂　宝山戯牛和尚の肖像を安ゟ
聯　堂の左右の柱よ掲る戯牛の筆
一株老桂長年華
等解天香遠襲人
逍遥玉磷現瑞
材栄垂陰覆衆僧
波積山推摩詰家風真廣大
日乗月誌納佐法苦永殿充
大士當軒佛慶云須臾
高懸寶鑑庵漢殊常信身
聯　逍遥堂の三階背の窓ゟ掲る額筆者上よ
聯　戯牛筆
方丈　聯歟　牛筆
浴室　浴室　佛殿の右ゟ並ゟ額ゟ戯牛の筆
天王殿　内ゟ額ゟ帝釋四天王の像等をいと額ゟ二重ゟ掲ゟ額ゟ
天王閣　聯　内ゟ額ゟ安ゟ
鐘楼　鐘楼　坐禅堂の前よ並ゟ額ゟ戯牛の筆ゟ
鐘楼　此堂の名ゟ高泉和尚の撰文ゟ般若ゟ経ゟ三陀羅尼ゟを細書也
鎮守宮　天照皇大神宮　清日八幡宮　弁財天　編笄　塩竈明神等の諸神を崇む
大士當軒佛慶云須臾
高懸寶鑑庵漢殊常信身
天桂石　経巻の前の石の
大治錬朱未堪入選
唐室粉砕方許全場
食堂　佛殿の右ゟ並ゟ額ゟ戯牛の筆ゟ
聖わ　此堂の軒ゟにゟ魚ゟ撞ゟ版ゟを掲ゟ
弘福寺　内ゟ額ゟ安ゟ



文禄二年仲秋
初三隅田川
記行

牛頭山ふもとより
仏母寺へ行て
舟堂てまつり
れいの机の龕よ
り鉢の子をいただく
眼前のあらたふと

舟堂や
あさがほ
ひとつ
あられ
うれ

秋風

遊牛頭寺　南邦

門外長堤墨水流
江東實樹倚牛頭
金龍閉閣誰家宴
玉女陵波何處遊
艤棹舟搖潮脊繁
烏帰下晩洲浮
到来心地應空澗
更風烟起客愁

いほ庵 寄

そうえうけち俤聞請地
あれそ秋景権現の
辺をもつ
唱ふまでも
なうそうと

須磨のようす
請地秋茶の
辺傍まその間
肉店多く
各酒をうまく
鯉魚を煮
酒客ねく
らん享飲を
中まも葛西
を年とそろん
葛西之年
清重のそ酌
うりとそ付のれ
とも是非をそんん
むさくといへ
蕎麦飯そうとを
買たりーの美
計とそろまて
麦斗と唱へたり
しもふりひさーやとのく
ろひと麦斗と号てを
ちくまれよ
うりぬ

牛頭山弘福禅寺大鐘銘並序

瑞聖鐵牛和尚住弘福之明年修葺寺宇將大完卅
伊氏伯耆守直武公興王心院太夫人壽林元榮大
師施心施金爲造巨鐘以利幽顯寓書徵余銘爲之
銘曰 牛首之阜兮有大法將整飭琳宮兮曷殊天匠幸備
賢守兮母子全心乃召氏兮乃簡赤金籠斯巨器
永鎭禪林曉昏擊兮以利幽顯曰福曰壽兮夫
豈淺鮮用祈千春德兆樂業兮四海
歸仁蠢斯衍慶兮子孫振振以空爲口兮審妻爲毫
擬書厥勳兮莫禪一七
貞享五年歲在著雍執徐林鐘上澣穀旦
東世四世高泉敬撰

牛頭山

聯句

漢門總門額の扁字を掲ぐ左右の柱の筆者上よ

福地弘安旅条集

玄門高祖玉泉院

秋葉大権現社　同所三十町ばかり東の方請地村あり
遠列秋葉権現を勧請し稲荷の相殿とす　当社の権輿
未詳といえども或いは云う応永年間の勧請なりとも別当は三宝寺なり

千葉山満願寺と号し神泉の松と称する社前よりして松の根より
清泉涌出すをもって諸の病み験ありといえり
境内林泉幽邃にして四時遊観の地なり門前酒肆食店多く各
生洲を構えて鯉魚を蓄う

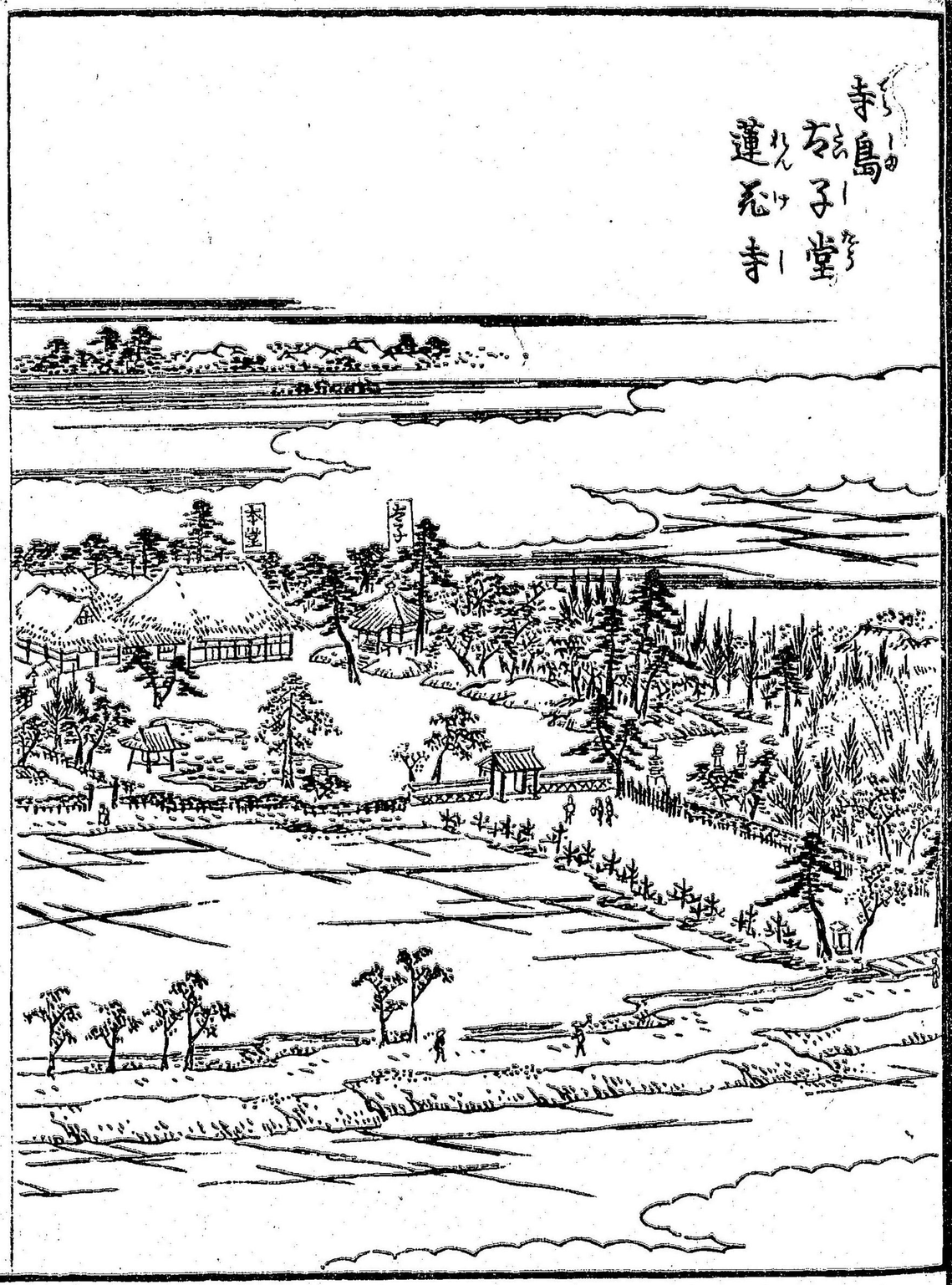
清瀧山蓮華寺　寺嶋村小名寺嶋にあり　寺記よく昔此地は海原なり後世漸く陸地となる
本尊不動尊は自嶋西まで嶋の北条氏の所領役帳に行者堂と載せたり
左子堂　本堂の右にあり　当寺の真言宗なりし頃勧請ありしかと
不子自彫造ありしと云北条氏鎌倉住
円谷よりしを弘安二年の秋北条頼助寺院となりしより本尊と
此地へ引移し同年八月二日入佛供養を営し故今に至る迄此日を
以て縁日とす又曼荼羅二年の夏國中大に疫疾流行し
人民死する者甚だしかりしより経時頻に是を歎き奉るより告て諸人の病

請地

秋葉權現宮
弁才天社
八代世稲荷社

社頭ノ青松
神木ノ桜
名所ノ秋の比
沙の景
時を得
ゆふべ
寺院

若を消除せんとて懇に祈願と成夜本尊の経時に霊示ありて秘蔵を揚よ即此秘蔵ふようて其頃病を退る命を全ふする者もそ
もろもとろう（今より重ねて件の秘蔵を出すべし）
相傳ふ寛元四年丙午三月下旬北條経時疾ふ臨む其時舎弟時頼を側く招た示てえく我疾難治ふり死後ふ至らい一守の梵刹を創
建ー年頃念る処の聖徳太の像を安置すへしといひ残て同四月
朔日亨年二十八歳ふして逝去めり（東鑑ふ云寛元四年丙午閏四月一日今日入道正五位下行武蔵守平朝臣経時卒と法名ハ安楽寺ふ二十三
日記ふ見ゆ）依時頼遺命を奉ー鎌倉佐助谷ふ一守を開き蓮華寺と号く（此則ち蓮華寺風前経時の法号を以て寺号とせり）即辨法印審範を以て開山とせ
ふ出離の志頻ふ切ふ忽ふ刺髪ー弘安二年の秋鎌倉の蓮華寺ふ嶋を領せしろ
寺嶋ふ移ー自宅山たり（東鑑ふ云弘安二年八月大僧正頼助と号せり惣ふ先ふ審範を宅山とすとあるは此ふ至ーて頼助宅山と
とりふくを誤りふるへしよて頼助の頼助ハ頼助の字を載ー傍ふ依と朱傍と注せり疑ハくハ依ふ

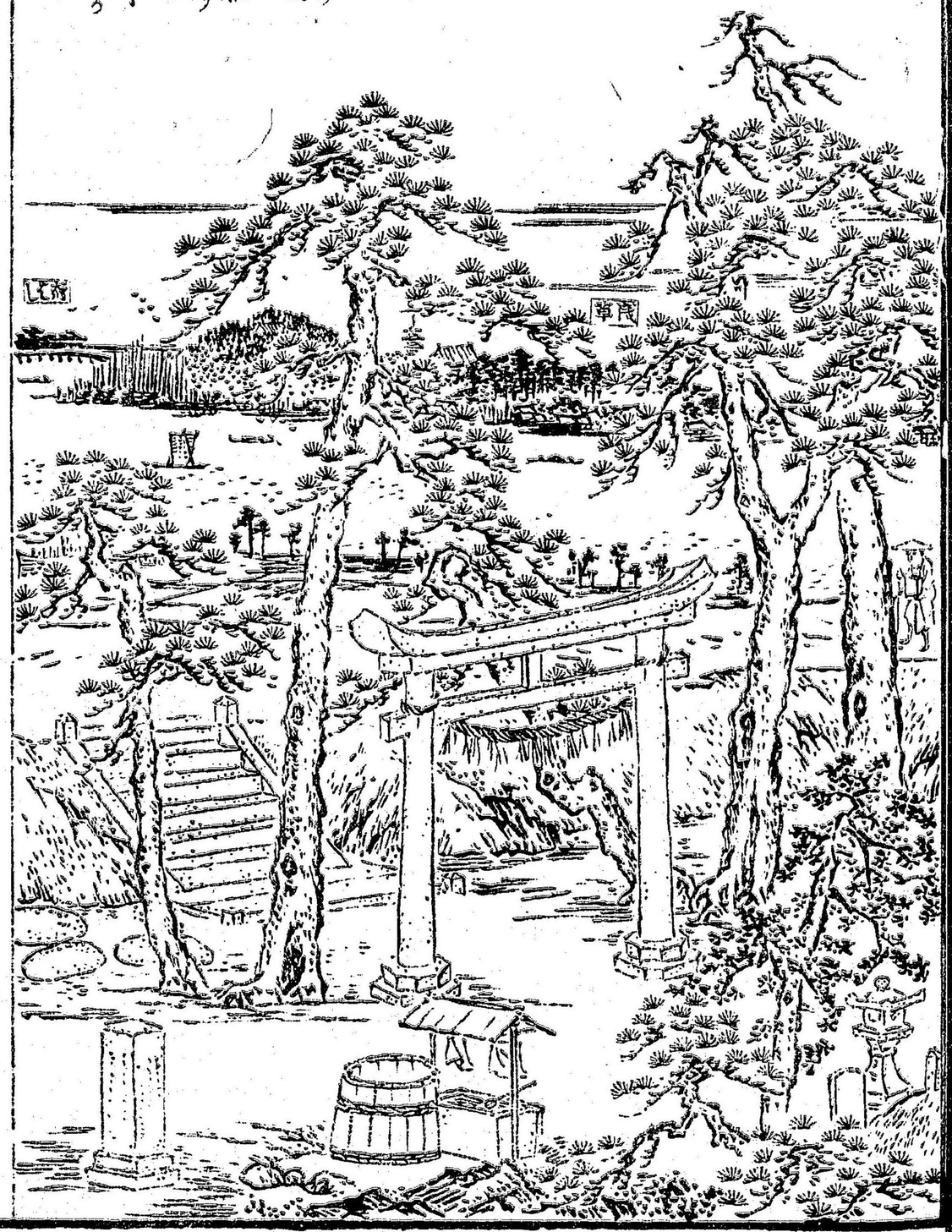


寺嶋
右子堂
蓮花寺

元亨三年北條家滅亡の後も猶尊氏將軍及び宮領基氏等崇敬厚く田園等を附し御教書を賜ふ其後文明の頃下總の千葉両家と別して時々合戦止時なく兵火の災屢ありて當寺も大に荒廢せり然るに天文年間小田原北條家の領地となりし頃遠山丹波守奉行として寺領等を寄附せるを天正の後四海泰平に治りしことを更て寺産をいふ

按ずるに鎌倉光明寺の末山記主禅師傳によるに鎌倉光明寺の末山記主禅師傳によるに佐々木氏頼綱入道寂仏と云ふ又鎌倉大日記によるに建長二年往時の事なり又建長寺建立住持良忠とあるによれば建長二年往時の後七年を隔てしより依て考ふるに其間七年を隔てしより依て考ふるに其間七年を隔てしより依て考ふるに其間

白髭明神社



隅田川（すみだがは）　梨沖門（りちうもん）　都鳥（みやこどり）　名所（めいしょ）　歌枕（うたまくら）　古今（こきん）　新勅撰（しんちょくせん）　新後撰（しんごせん）　玉葉（ぎょくよう）　新拾遺（しんしゅうい）　新続古今（しんぞくこきん）　夫木集（ふぼくしゅう）　嘉集（かしゅう）　新葉集（しんようしゅう）

隅田川（すみだがは）　梨沖門（りちうもん）　都鳥（みやこどり）　名所（めいしょ）　歌枕（うたまくら）　古今（こきん）　新勅撰（しんちょくせん）　新後撰（しんごせん）　玉葉（ぎょくよう）　新拾遺（しんしゅうい）　新続古今（しんぞくこきん）　夫木集（ふぼくしゅう）　嘉集（かしゅう）　新葉集（しんようしゅう）

隅田川（すみだがは）　梨沖門（りちうもん）　都鳥（みやこどり）　名所（めいしょ）　歌枕（うたまくら）　古今（こきん）　新勅撰（しんちょくせん）　新後撰（しんごせん）　玉葉（ぎょくよう）　新拾遺（しんしゅうい）　新続古今（しんぞくこきん）　夫木集（ふぼくしゅう）　嘉集（かしゅう）　新葉集（しんようしゅう）

隅田川（すみだがは）　梨沖門（りちうもん）　都鳥（みやこどり）　名所（めいしょ）　歌枕（うたまくら）　古今（こきん）　新勅撰（しんちょくせん）　新後撰（しんごせん）　玉葉（ぎょくよう）　新拾遺（しんしゅうい）　新続古今（しんぞくこきん）　夫木集（ふぼくしゅう）　嘉集（かしゅう）　新葉集（しんようしゅう）

梅花無盡藏　江上春望　註曰道濃静勝公招福鹿

兩山諸尊宿並小年浮舩數艘於隅田河詩歌鼓吹

一時之壯観也

十里行舟浪自花　春遊不覺在天涯

隅田鷗亦應都鳥　鼓吹晩來擊入霞

註曰隅田在武藏下總兩國之間路傍小塚有柳道

灌公爲攻下總之手業構長橋三架云

隅田川即事　景琳院二品良尚法親王

夏天波靜角田川　桴子蕩槳迷蓋舩

當時紫平遺愛地　風流千歲至今傳

後葉集　住田川よりりくまれるの住ねめまく人の書をる捷尺の物

ともを先立見せけるにそよみてそへつくはしける

我もまつこまにとる筆のすさひそ　鳥丸光廣公

おもひかけなくの都鳥今いとゝ

名ゐのみくの都鳥今いとゝ

門徒冊の名ゐ山時往くとめり

都鳥何ことゝらむ　近衛信尹卿

懐紙のとくるる書状まく花押とそ

そこゐなき我そこ都鳥うらめつゝ　照高院門主源

すゝ戯よ

まくそこるよむさくの國の江戸うら　近衛信尹卿

海草のまく愛長十二年とめりて花押とそ

北と東のすゝ

隅田河そこにをのこ〳〵都鳥めりしたゝ　冷泉為久卿

花鳥よ書むや千里すゝ汐舩とめてこるまをとのそ

何花もりのとそこれめつらしたすゝ汐糸のまをとひきて　景室頼胤卿

ものこるる哀〳〵をめさめてすゝ汐糸の廣き流の波もさゝとを

笑〳〵も袖とそぬれ限なく　戸田茂睡

名波根の嶺吹拂ふ春風よすゝ汐糸の乱そほとろの　冷泉為村卿

隅田河都のほとよも絃ともきゝたちよ　有栖川幸仁親王

此余儘神名の歌草をそひ給名ゐのまに

故事ふいとまめらされいとよりらとそ

前年承記云前上總介年忠常長元年の春そをを下總國よりて總國よりて

謀叛を企て鶏よ便宜の兵を招たりれい同年八月京都うたゝ

追討の大ねらゝそ左衛門佐平直方右兵衛佐中原成通等朝搆ゝ
應ゝ二萬三千余騎ゝ發向ゝと忠常其身八千葉の堺ゟ搦勢舍弟
陸奥權次忠頼を大ねゝ其勢二萬余騎を率ゝゝすゝゝの
南ゟ陣を取同十五日官軍成道の舍弟伊勢次郎直方の
息阿多見四郎聖範共ゟ勢を合ゝゝ先登ゝゝ戰の故ゟ先陣の
太頼政生ゝと忠常ゟ殘兵一萬五千余騎ゟ駈立られ官軍の
後陣ゟ取ゟ直方も引道の勢の落来ゟ推立ゝゝ
返ゝ放軍の兵卒を集んとそ隅田川ゟ陣を取ゝ云云

東鑑曰　治承四年庚子十月二日辛巳武衛相模
守常胤廣常等之舟艦潜太井隅田両河精兵及三
萬餘騎赴武藏國豊嶋柏井清光葛西三郎清重等
最前參上又足立右馬允遠元兼日依受命爲御迎
參向云云

北條九代記小文治五年七月十九日頼朝ゟ奥別當衛追伐の旨途ゝ
ありと云条ゟ千葉次常八田右衛門尉知family東海道の大将と
ゝそ常陸下總両國の勢を率ゝそ守ゟ行方を指ゝ岩沙ゟ隅田
川の渡ゟ渡ゟ通ゝ下器

須田河原　隅田河原ゟ改ゝ

夫木集

ちゝくゝとすゝのゐ糸を朝行の
隅田河堤　深畑稼ゝちゝはり熊谷ゟ至る行程九拾六里ゟ餘谷堤と
云天正二年小田原北条氏ゝれを築たりとゝゝ

宿府の命ありそ三圍稲荷の辺ゟ
三樹を殖さをられれい二月の末ゟそ紅紫翠向枝を
交へされゟ錦繍を晒ゟ如く一時の壯觀たゝ
栄菜盛りの頃ハ花堤を數ゟ如く一時の壯觀たゝ

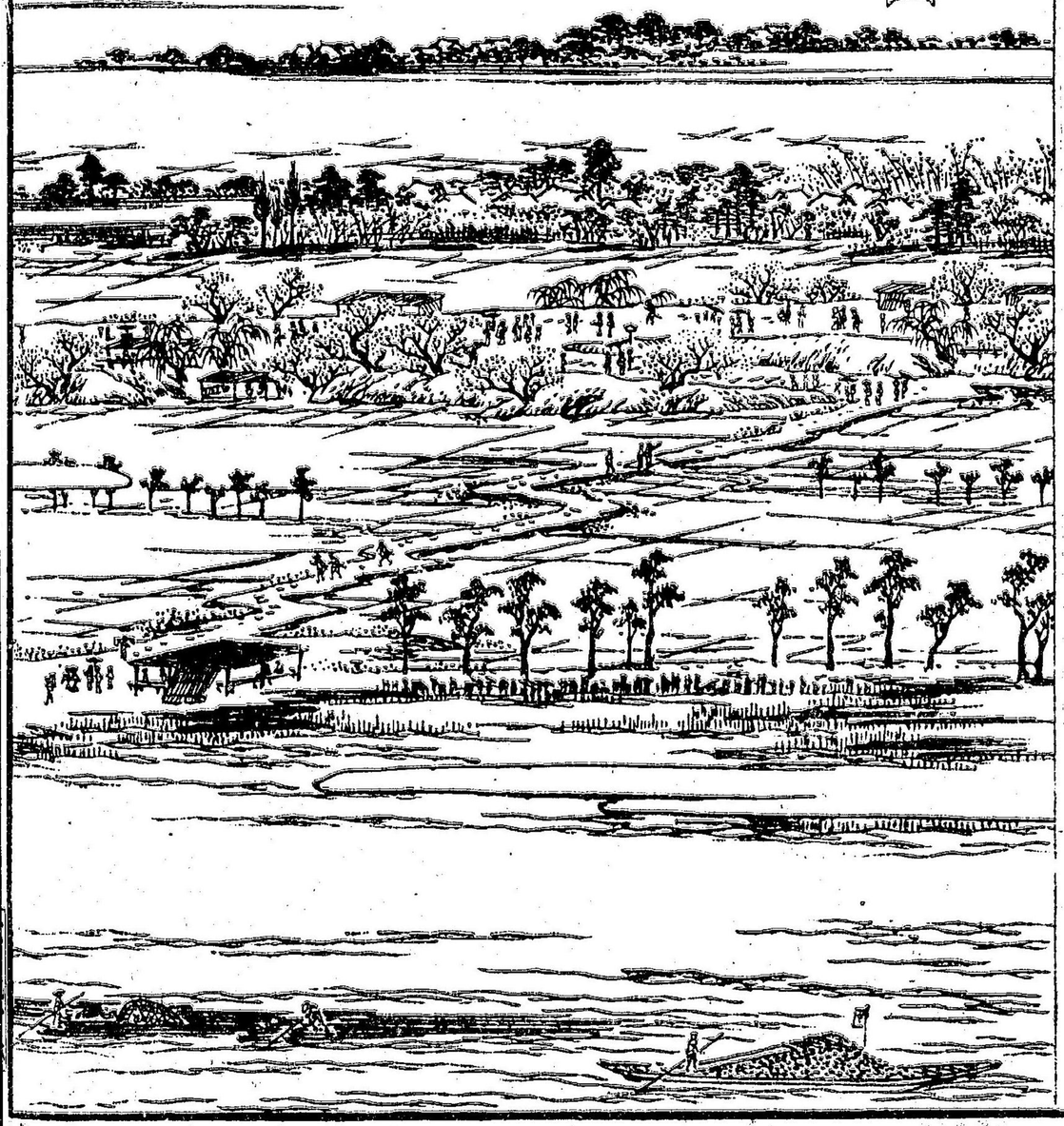
隅田宿　打れの北をゝのゝ今ゟ
ゟゝへゝ東艦ゟ治兼四年庚子十月二日頼朝ゟ井隅田の両河を渡ゟ
ゝとゝの弟ゟに今日武衛の御乳母故八田武者宗綱ゟ息女

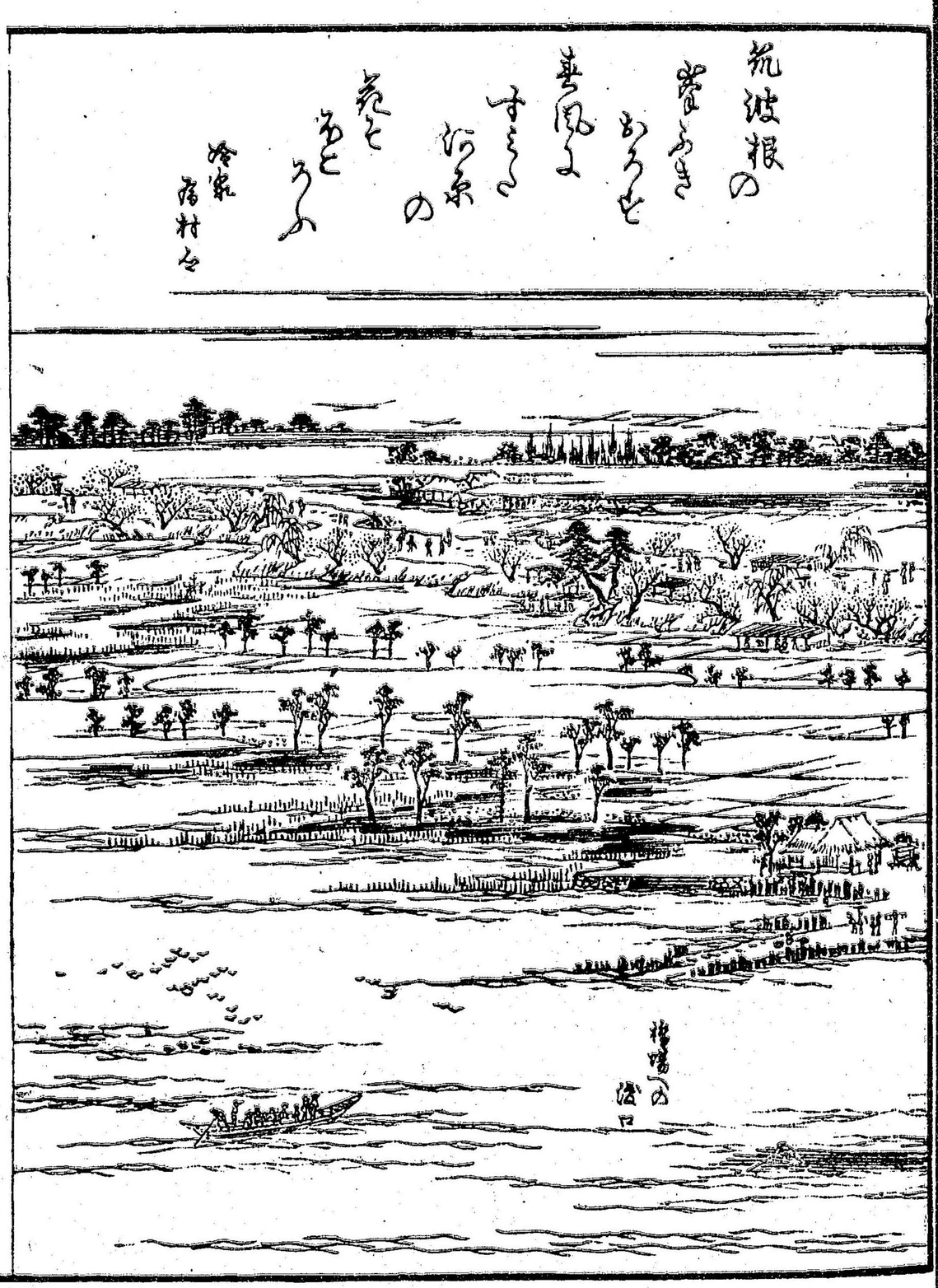
隅田川渡

隅田川東岸

初春も
なかばそ
うき
めうらしき
すみた
川の
春をと
きて

冷泉
為久





筑波根の
雪ふき
おろし
春風よ
すみた
川の
名を
そとも
うん

冷泉
為村

隅田川堤
春景

そろ〳〵と
歩行ませう
隅田川の堤をそろ〳〵と
行ば
青柳の枝髪も縁の眉
まゆひきやうにそよ〳〵と
花のそとろひそめそろ〳〵
あゝもひはくらくらとうんと
えひのりをたゝえいと
ひとそろひたる揃頭哉
弥らんとそろ〳〵
とまろるまの春
うらゝそろ〳〵

按ずるに今木母寺より東北の方なる本の川流をさして土人古隅田川と唱へ隅田宿ともいふもさの辺なるらん故

都鳥

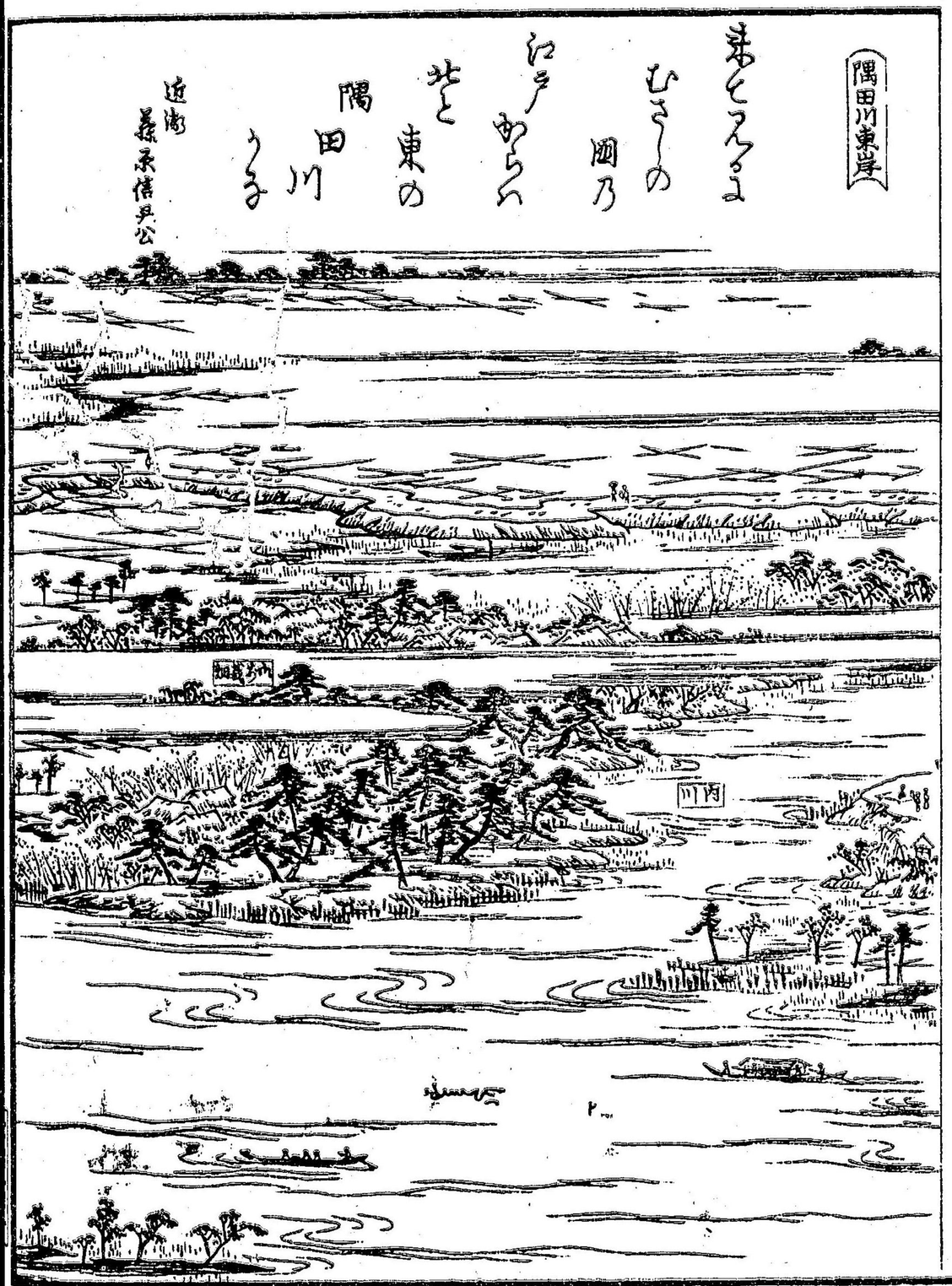
蕎麦伊勢物語よ京鳥藻刈草城鳥よ作る真湖名云く古本よ儔とあるを草書ようたがへるなるべしと雲御抄藻刈草城鳥よ都鳥隅田川なども記されたりともあり又武蔵の海志賀浜飾磨なども都鳥の名所なり難波堀に高津宮輪田御崎なども今著聞集よ院の御随身秦武勝が都鳥集あり泉よりかよひ来るとあり又古

東嚴山木屬と本尊い五智如来るり中よも阿弥陀如来の像ハ聖徳
太子の作るりと云伝へ貞元年間忠圓阿署梨當寺を草創せ天正
十八年合令めり依て梅押山と号と昔ハ梅若寺と呼こりしを慶長十二年近湖関白信丑久武我
國よりをめし時陽田河道遠のゆくて小當寺へ立こらせられ寺号を改
むへくいふとなりしかハ寺僧應諾を依木毋寺の號を賜ひぬ其時勅書
木毋寺と書さしれしと梅ハ毋よ木毋寺ハ梅の分ぬるりんされと梅ハ台
梅の分ぬるりんされと梅ハ台老よへく大虚谷光悦の筆の木毋
寺額を賜ひぬ
寺料若干を附ちられ朱章を陽ハ又寛文の始　大樹此地
御遊猟の砌當寺を御建立めりて新殿を造こせぬひぬ
北朝山濤字致遠赴召宋神宗問曰卿自山路来自
驛路来濤曰自山路来上曰木公木毋如何濤曰木
公方徽歳木毋正舎春
注曰木公松也梅也稱吉除中書云云
木毋寺縁起の跋ハ湖海新聞をりて梅を木毋とするとハ誰ほめり園とたよ
志の意ハ同しく又青木氏ら著せる草廬雑談ハも此ものを載しりと今集のよ
雪ふれい木毋に花そ咲よりるいろ香ハ木毋ハ梅とうたてあらまし　紀友則
千載集
春の歌ハ咲もの風のうり香ハ木毋ハ梅とありひもあるれ　崇徳院御製
續古今集
年の内の春を木毋の梅とそ春を近くと告ハ　将家
ハ連枝よるも梅とのみ文字
つくりしまりのり
梅若丸塚　木毋寺の境内よめり
山王權現と　縁起ハ梅若丸ハ山王權現の化現のりと云
物い柿と今若木を殺くたを　後ハ柿を植て是を印の柿と号く昔の
例年三月十五日忌日たる故ハ大ハ仏事行り此日都ハの
貴賤群集ぬり
田園雑記　わくすゝきハの辺よりそ披講ぬとて
いまくの塚のあめのふれさ今のとくにおもえて
古塚のあけもくみのすゝきハ汀まりてもぬる袖ハ　道興准后
中院一条冥白康道を関東下向のとき此地
逍遥めり

木母寺
梅若塚
水神宮
若宮八幡
隅田川東岸
木母寺
梅
若
塚
其角

田圃雑記
古塚の
道興准后

隅田川東岸



都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関　　従二位家隆卿

むさしの　岡乃

白河の　せき

東の　隅田川

うた

迫間　義承信具公

まてこれかうへし　柳のもとの古塚　　良尚親王

うえをきをみやこ忘れぬ人もあれや古塚よ都の宮こ風の夢

此塚ハ曼殊院宮実条一下向の時此地にて頓死ありし御供の輩卅人ともに埋ミし所なりと山際住人ともいへり

古塚ゆへよしや　枯木なりとても　花の昔を　忘れ草

此塚ハ曼殊院宮実条一下向の時此地にて頓死ありし御供の輩卅人ともに埋ミし所なりと山際住人ともいへり

いつの真壁の縁州今ぞ来ぬ　　従二位為家卿

縁起云梅若丸ハ洛陽北白川吉田少将惟房卿のご子息

吉の御神ご新ありて後儲けられし一児なれハ殊更愛し給ふ

哭ぬ人こそ　一花のうちすれいとど梅若丸とハ

七歳の年比撫の月林まで入て習学ばせ又其頃東門院といへるハ

松若丸といひ児ありて日頃才の程を挑み争ひけれとも梅若丸ハ

をとゝをとゝりさるを彼坊の法師原に惜むるまゝひとゝゝ闘諍の

事出来ぬ　されハ梅若丸ハ潜かに舟を道まて北白川のおや帰らんと

ゝ吟めて大津の浦に至る頃ハ二月廿日のよゝの夜ふり雪ハ陸奥の

信夫摺をとゝる人商人かと出のひ旅ちをわひ欺まて遠ハ東の空ハ

福若先生のうへ
比叡の月林まを
のぐれ出て花洛北
向川のあなたうら
もつかて大ぼの
浦よりかへるて
奥陸の信夫のあた
とゆきゝ人めにひとの
たつまもしらくとの
閖田川よまゆみの
ところもけふ
詳なり

図よき人買採ち
陸奥南部の産
うりとて今も菊
部の人は其恩霊
ゐるをを忘ぬ
よまさるこそ
部田町邨に弓氏の
人ぐ
ありそ
なさるゝ
〳〵

やまもらうと此隅田川小堤に至る時よ貞元元年丙子三月十五日なり
路の程より病よ羅生を此日終小此地よ於て死ゆくとねいまその際よ
あやしを領七 孚きそとちとえよ都鳥すみ河系の家と消ねと
此時当羽国羽黒の山よ修行忠圓門閣梨と云貴き聖ありそうう
通りて児の亡骸を一堆の塚了祇守紀押
撰しと此隅田川よ吟ひまりき青柳の蔭よ人の群居て孫君ぜうをめや
児のうえ沈をともひ仿りそるよ其日梅若丸の母君 付縁起よ狂乱前とを
しと舟人よ其故を問ふ二 美濃国野上の長者の
まりとめり或云花まるも浅薄髪と物狂
の為髪方髪事いそ公の答を妃一言答をもそうととふ
の明易く情の深いと共よ消うセね母君い夜あをて後忠圓門閣梨よ

見えあるとうと告て此地小草堂を営ミ門閣梨をとめ小居ら
常行念佛のつとめ場こあのて児の亡跡をそ吊ひあ
社夜長物語とふる草紙の題よ似てう其傳よ後堀川院の御宇北嶺
東塔の先徳よ勅学院の宰相律師けいのとの
初養よのうつらそ山離の勤怠りぬるよ
たり七日ばんする夜ふ変ぬ美女一人をそ後
御坊よ住てこ条京極の花堂を左大臣のそ
られいを讃院の御坊の庭のつよれたり時
うとひとり一夜そうの袂をひをひろ其後い悲歎のみ
律師のりとを尋んとーつうとりよ吟
いそうきにもそれ天狗そりのうともられ
せもこひたりーよ年のとくけなる山伏あり
うきりのと行よりそれいつとふ難んたりあり
さうそこ条京極うりの史の大臣のりく
牝ひきそうねをとのへても山口へ押まりん
うま二時耶戒壇を建い山門の先徳ぜてと
二十万七千余人ふて乱入先をもりて焼排ひ
花堂も焼ぜの弟とうそ向へたくもうー
たまふらも又遠らと焼排ひ且てそそ
行うそーそ律師の行ふ
律師も童もりうともよ児の此を投ねる
くこの僧とさおよてうたらそ求め山
へんれい律師の天よのまてうきこうーうめてしもある
よ庵室をひとをひてそほとある行ひける童も髪をおろーて高野山

又謡曲隅川といふもこれよりうまれし其畧よし後来雀院の御宇長暦二年中採業ぼよ撰ぶるとくくる美か年のりーろ人高くよ句ろれ常陸圖磯ぶの神の社侍社宮まさまろ
うくとも右らそだんろめり湯をよ孝さまろ
至り岸花爛漫ろて盛みよ澤へさまをいぐ
ーくれい里人等其故を問ひひ合するうめれ
うれーこのおろう物ろひい忽よりろくーよふく
ろう慈悲深ろうくれい直さまよ撰ろるよ眠そ
拾よ撰若九の事績い先よ挙たる物く伏夜長物語ろひ謡曲の隅川等ろよ併相似くろ

墨花無盡藏詩註曰

隅田在武藏下總両國間路傍小塚有柳

又同書曰

河邊有柳樹蓋吉田之子梅若丸墓所也其母北白河人云云

此趣謡曲の隅田川よりて出ます緣起の意よ相似くろまよ先よ記せー四圖雜記等の書よもだ塚とあり四圖雜記ハ文政十八年の記行ろて寛政の介ろろ元三百十余年を開たる昔ろう其頃さくだ塚と唱へたりしろれいろ内川本母寺の後の方の小川をいふ或人の説よ往古荒川綾瀬川ろ投よ流れ一時の古址ろりとぞ

御菑裁畑　同所内川を隔ろ北の方の出洲をいふ

題美景ろり

丹頂洲　同所是のよりあり洲の中よ小島を築く往古

台命にて

此洲の中嶋に丹頂ぬ鶴を放ち餌ーあひ故ぶ名とりとぞ

庵崎　本母寺の北の方ともよ又いふ

澄月ぬ松よ武藏圖よ加くまま本母蕨注算等よ總圖よ入たり同名駿河ともあり紫の一本といふ是もはろうそそ又同書よ冊ろよ小梅村の出洲をろ後と云人のりのりー故よ五百磯よ作りーとぞ昔本所の北ぬ海よて洲崎殊ぬ勝ーく新撰掖遺

霞たなびひそひもをろね春曙　尚長

建保名所百首

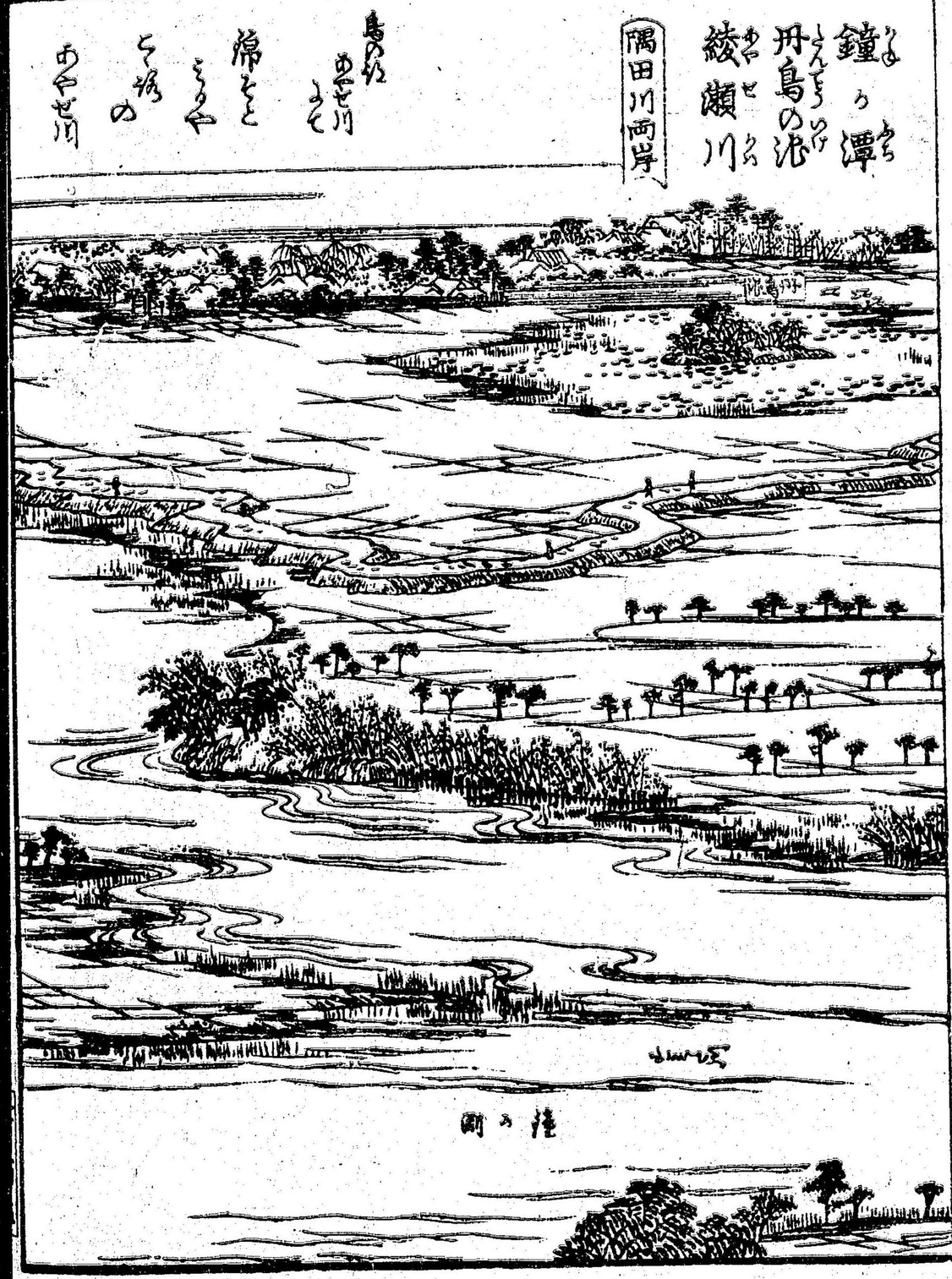
今春ぬ誰若もらんいろよ霞屋里　牛田の辺をいふ澄月ぬ松よ武藏圖よ入たり

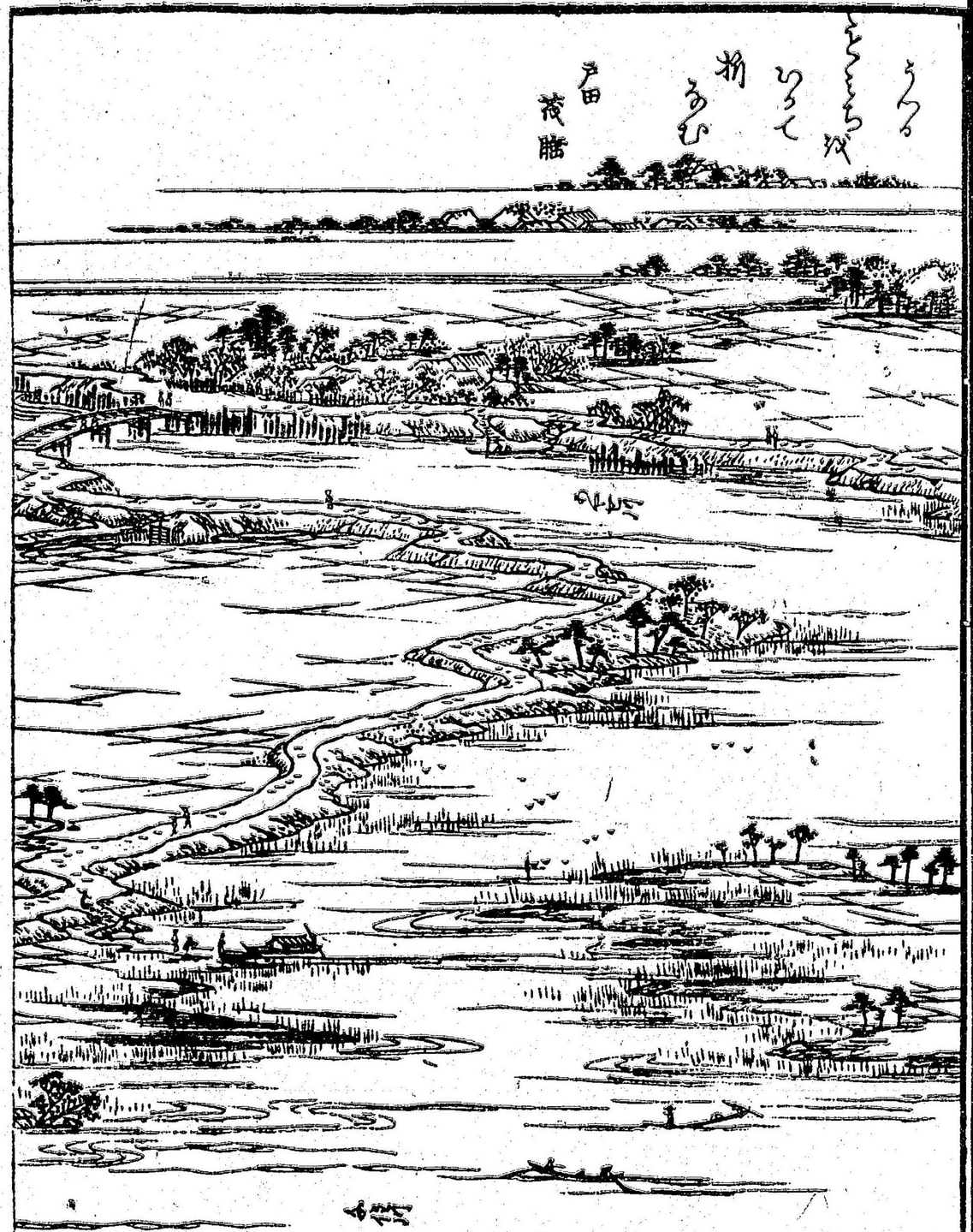
春曙のすこそ河ぶ面に日かくまの集よりの康ええ年九月鹿嶋の社よそろくーよ隅田川のもうくーよ此渡ぬ上のろよ河の落よようくーよれい実石の里ともろをよ松よ海松もおろくー海たりとぞ

石山僧院の宮実東洲下向の時此地よ逍遥ーあひて

如くるさの道よ実石の里もあれな隅田川ぶ糸のおろろめよ　道見親王

隅田川両岸

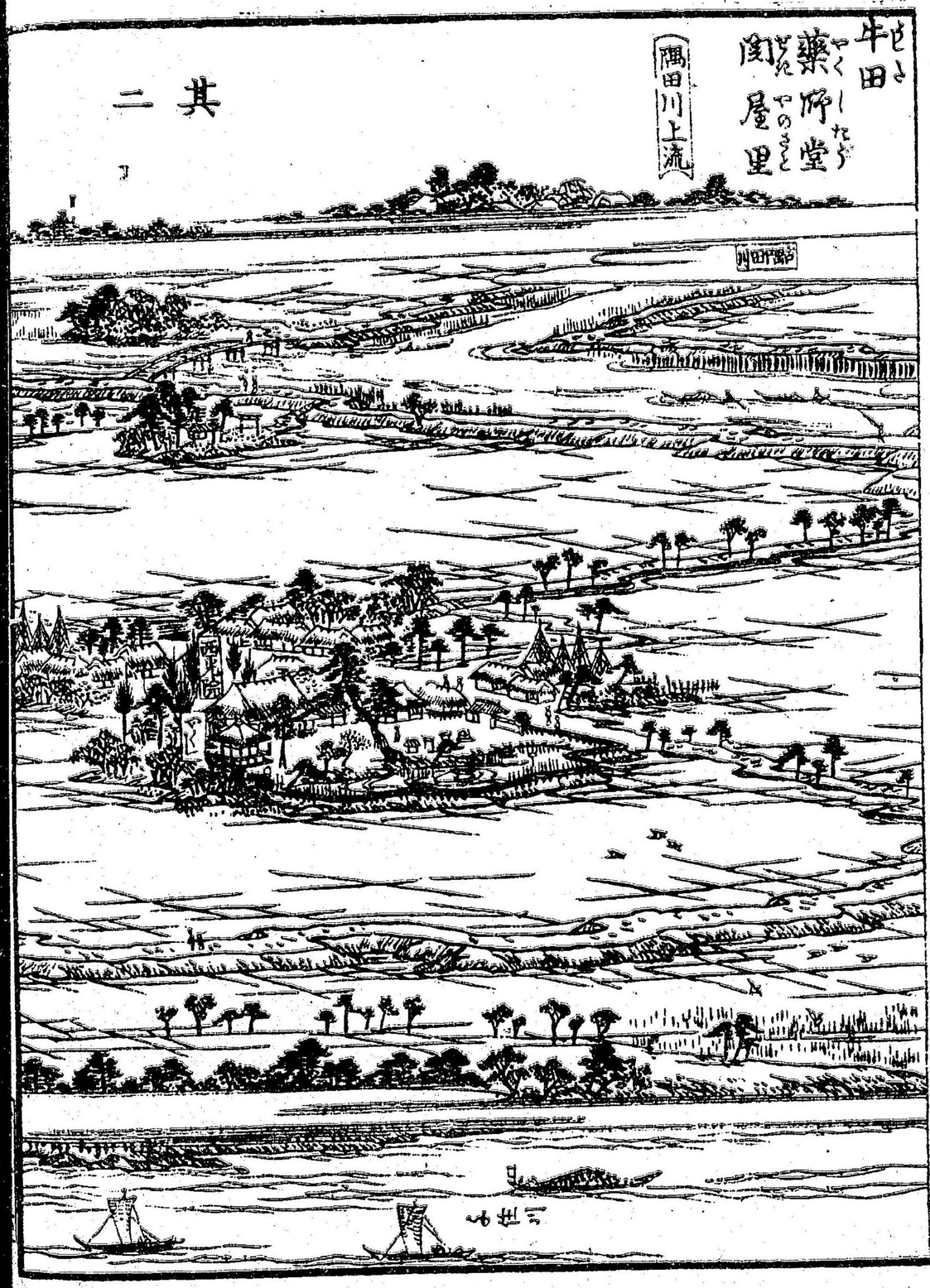




其二

隅田川上流

牛田薬師堂(やくしどう)のほとり関屋(せきや)の里(さと)

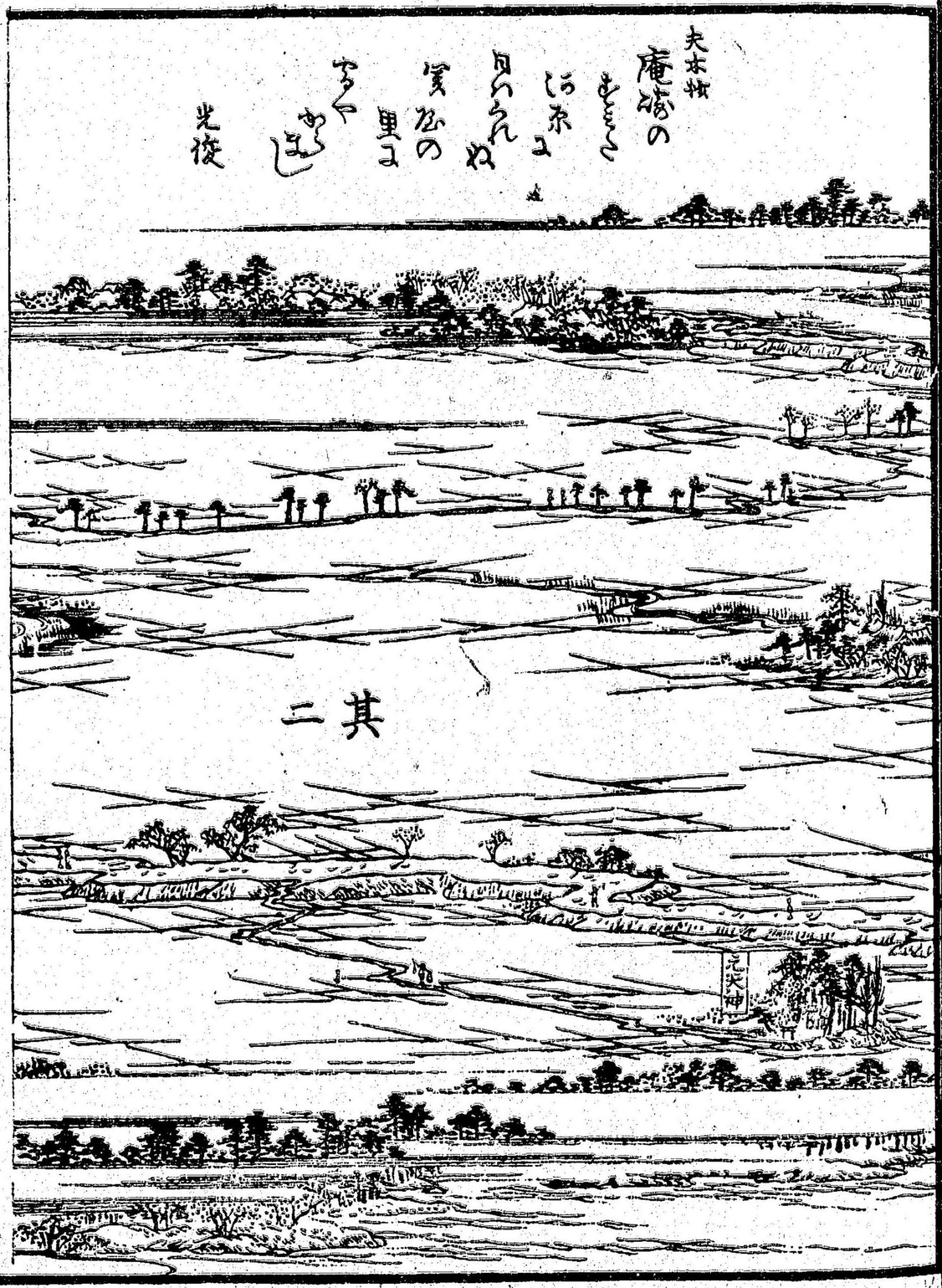


其二

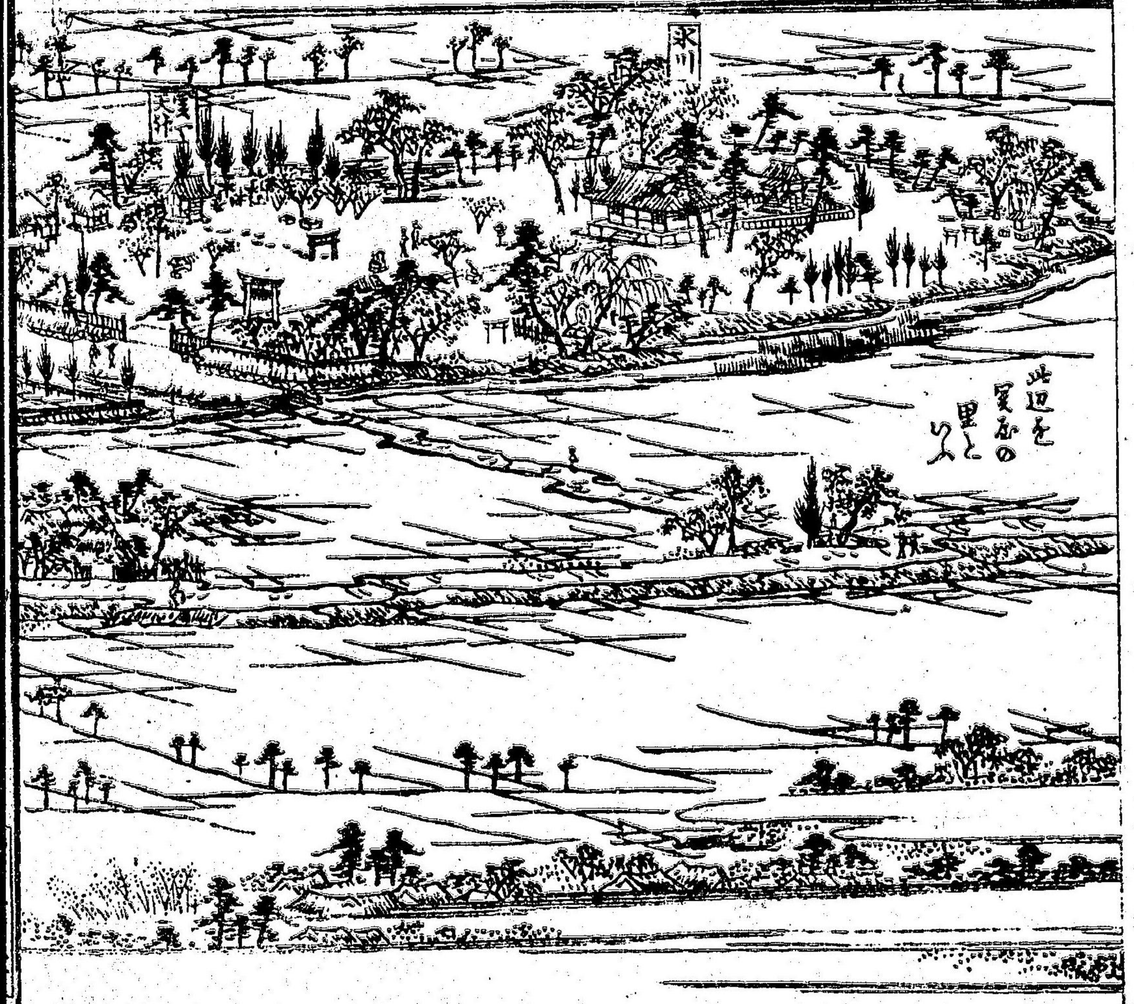
大木神

庵崎の
もりこそ
しるしなれ
月もうれぬ
冥加の
里ゴ

光俊



関屋天満宮



鐘ヶ淵　同所隅田川の川岸綾瀬川の二俣の本をさして名をく小田原北条氏の知領被ル
手業廣とある石鎖の中ほどに立三俣と
いへる地名をかゝへり按ずるに此ほとり
流没だりとも又橋場長昌寺の鐘ありとも伝ふ昔普門院といへるまの鯨鐘此淵よ
新鑄の鐘の銘文も此ことを載たれど何ら是ならん

牛田藥師堂　本田寺より二四丁北の方牛田村にあり
山西光院と号く徳治二年丁未當國の領主多葉氏の草創開山を
覺音法印とのみ本尊瑠璃光如来の弘法大師の作ふくみ多葉氏常
徳崇尊の霊像ありとそ伝へて霊験著〜
桐傳ふる葉攻常徳の子を商よ同五郎徳朝といへる者あり下總香取
郡石出といへる地に居住〜石出日向守と號ふ此牛田村へ徳朝引葉永和
隠栖をも其末流波雪入道吉深より至りて此牛田村より遷れり竟荘園の地を

葛西の辺、人家の垣
園もろ〳〵、園暁よ
春ごとの事のまを苑を
栽並えんとうゑもよ
苔香をも顕都う
夫園丁の時ぞ
潤そそんと灯取
大じやの市街
花戸より
醤ひさぐ

轉して梵宇となし西光院と号くとい
へども湯ひ虜獄令の官士にて命せ
られし程の寺にはあらず元和の
頃まで延宝中半田村に隠栖一老軒と号くと和尚のいへり云く

一宇の尼ありしが去る頃死せりとて
今は空しく荒れもあらず常
に掃ふ人ありとぞ

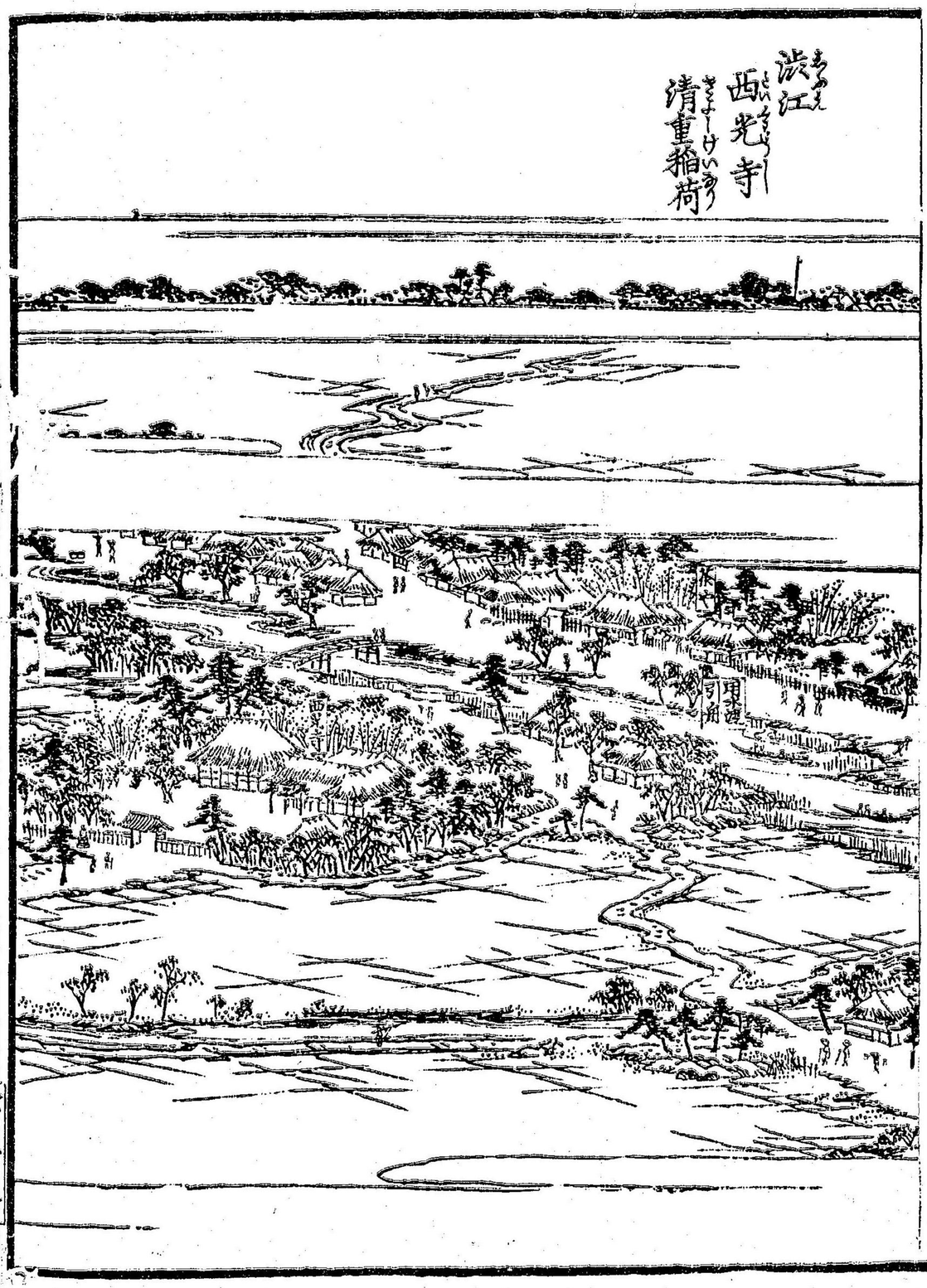
一冊子

若宮八幡宮　若宮村にあり別當は玉言宗にて善福寺と号く社
傳云往古文治の年已酉秋七月右大将頼朝卿奥州泰衡征伐として
發向あらんとし同十八日伊豆國より專光坊の阿闍梨を召て潜よ
泰衡征伐の立願の旨と告らる同十九日途出ありて勢揃よ一ノ
余騎なり東陽より十九日丁丑二ノ奥州發向の条まで
供奉の輩一百四十四人の名を録せらる
の軍兵招集して走加もる時氏地をうばひ
糸満ありて源家無量武運長久の祈念あり
手自模の策と言い地ハ指定て云く此度の軍利あらハ枝根と
生て栄ふべしとて竟ニ奥州を治く凱陣あり
乃ち八其後鶴岡若宮八幡宮を勧請を此地ハ葛西三郎清重乃
領地たるより清重ハ命して社頭を経営せり又神田等ハ
寄附せらる其後年代遠く隔るより八障霧ハ軒を侵し漏雨
を厭ひ洗ひ奉草葺を止しめ秋の萬月くハ茂を瑞籬ハ崩
神楯朽て破壊ハ出ひしを天正の後　台命ありて伊奈
備前守再興ありしより重修く朱の玉籬光を章ふるう
夫も又昔とハ今ハ古松老杉矯々として窓々たる社頭
とハなりぬ

法華経一部一巻　其文漸く字もうすりて巻ふる圓
甚奇古　寺伝の説ハ頼朝公の手納ありといひつたへ
是非ともハ
超越山西光寺　渋江村にあり
浄土宗の寺院なり葛西二郎清重

（吉原姑小田系小栗家より出ハ渋江
と通家の名ハ通して食禄二百石
和ハ車と号く和ハ車ハ老軒
小田系北条家の古文書ハ山中内匠
呼領ハ渋江の地名を注しかへしより
紙ハ金泥にて細書物語の書ハ
渋五位下壹岐守豊島権頭清光の子なり）

渋江
西光寺
清重稲荷



一ら今天台宗ゟ改む本尊八親鸞上人親筆ゟ阿弥陀如来
の画像を安ゟ當寺の開基ゟ清重ハ鎌倉代ゟ勤仕の士ゟて
文治五年奥州泰衡平治の後同年九月彼地のまゐ職ゟ
任せゟゟ實朝卿鶴岡八幡宮拝賀の頃も随兵ゟ加へゟ
代々此地ゟ住ゟ親鸞上人東國遊化の時此地ゟ至ゟ清重
の宅ゟ投宿ありゟ時上人の弘法ゟ帰依一弟子乃禮ゟ
儲け名ゟ西光坊ゟ号ゟ又居宅の地ゟ搏一ゟ寺院ゟ営建
一直ゟ西光院ゟ号くゟ本尊の胎壇ゟ清重影造ゟる不乃
聖徳太子の木像ゟ安置せり

清重稲荷祠　西ゟ者の西いゟ畑の中ゟあり　松杉生ゟりゟる

古叢ゟて此所ゟ葛西三郎清重の墳墓の地ゟゟ今稲荷ゟ
勧請ゟ　（注）年の（注）ゟ此塚前ゟ（注）ゟ（注）ゟ土中ゟり石櫃ゟゟれ出ゟれゟ土人蓋ゟ
（注）ゟりゟ時櫃の中ゟり丈三尺五寸ゟりゟる（注）ゟの理ゟ梵字ゟ（注）ゟ
丈一寸八分ゟりゟの座像ゟり今西光寺ゟ収むゟ除武具のたぐひもゟりとぃふ

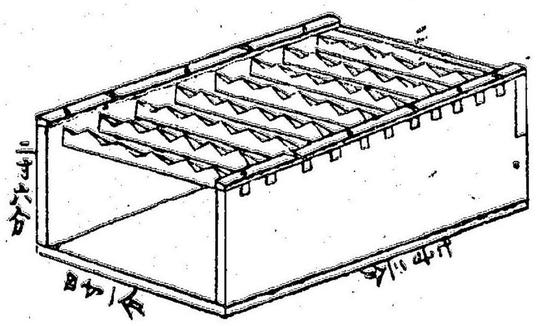
青砥左衛門尉藤綱第宅舊跡

永禄二年小田原北条家の所領役帳ゟ葛西青戸の号ゟ注せり今ゟ二村ゟ
御殿跡ゟゟ称ゟ今猶四方五六拾歩の所除地ゟて老杉繞ゟ
ゟる中ゟ小祠ありて此村農人の中ゟ廓の誰陣屋の何某ゟゟ
字ゟ唱ふるありて皆其時世ゟり呼来ゟるゟゟり

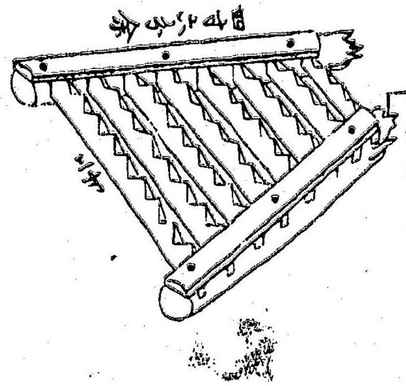
青戸村少ゟり　土人云昔ハ青砥ゟ他る
後世改めく青戸ゟゟ

古農山糞擦

拳るの工人此器と青砥左衛門藤綱と云ふ人の考案なりと今も此辺の農家是と用ゆるもの多し其図左のごとし



金平図のごとく杉と檜の薄板製も竹の厚きと鋸の歯乃ごとくそして夫と横の板へ切もの横板の上より同く竹の縁と打付て動ふねうにしたる物なり或人乃説り菖蒲華よ此かくのごときを紋あると俗よりひろめたるものと云ふ此器の形を借ていひ出せしものと是も亦一説なり又下よ図する板も亦製大方同うして形ちこそ異なり



水下川薬師堂　木下川村ニあり

土人子川と唱へ或ハ半仏と又亀毛川ともいふ

本尊薬師如来　傳教大師の作昭王日月十二神将の作る小田原北条家の所領役帳ニ朝倉平次郎詳なり

脇侍日光月光　白鬚明神　神祠

此地名青龍山浄光寺薬王院と号も天台宗なりて東叡山ニ属せり

本堂　本尊薬師如来　傳教大師の作

堂前左の方ニあり廣知達の人の筆なり

本地不動明王の像いわゆる覚大師の作垂迹の姿ハ老翁の木像にて蒐未作り如異相なり

天照太神宮　神躰　両宝童子　本地弥陀　山王権現宮　神躰　南無如来の像ハ恵心僧都の作なり　白鬚明神祠

東照大権現宮　神躰　景神ハ御本地薬師如来

弁天祠　大門乃右の方ニあり

此三社ハ往古慈覚大師浅草寺の観音ニ参詣の時瑞雲青龍を東方ニ現し此霊地を守護し給ふ因て青龍と鎮まり神躰普賢菩薩の作の塑像を熊野権現祠ニ安置正観世音十一面観世音の三尊の御散失しより遥の後弥陀の像を此地の土中より掘出しあらわし神体と定め今本堂ニ安置す

帰命満月海　淨名瑠璃光　法楽救人天

田中十二願　東照大権現　三國傳燈　山門執行探題　天海開眼

かくのごとく讃と添しひ其時の住僧某ハ附属あり今猶毎年四月十七日本堂の内ニ於て諸人をして敬拝せしむ

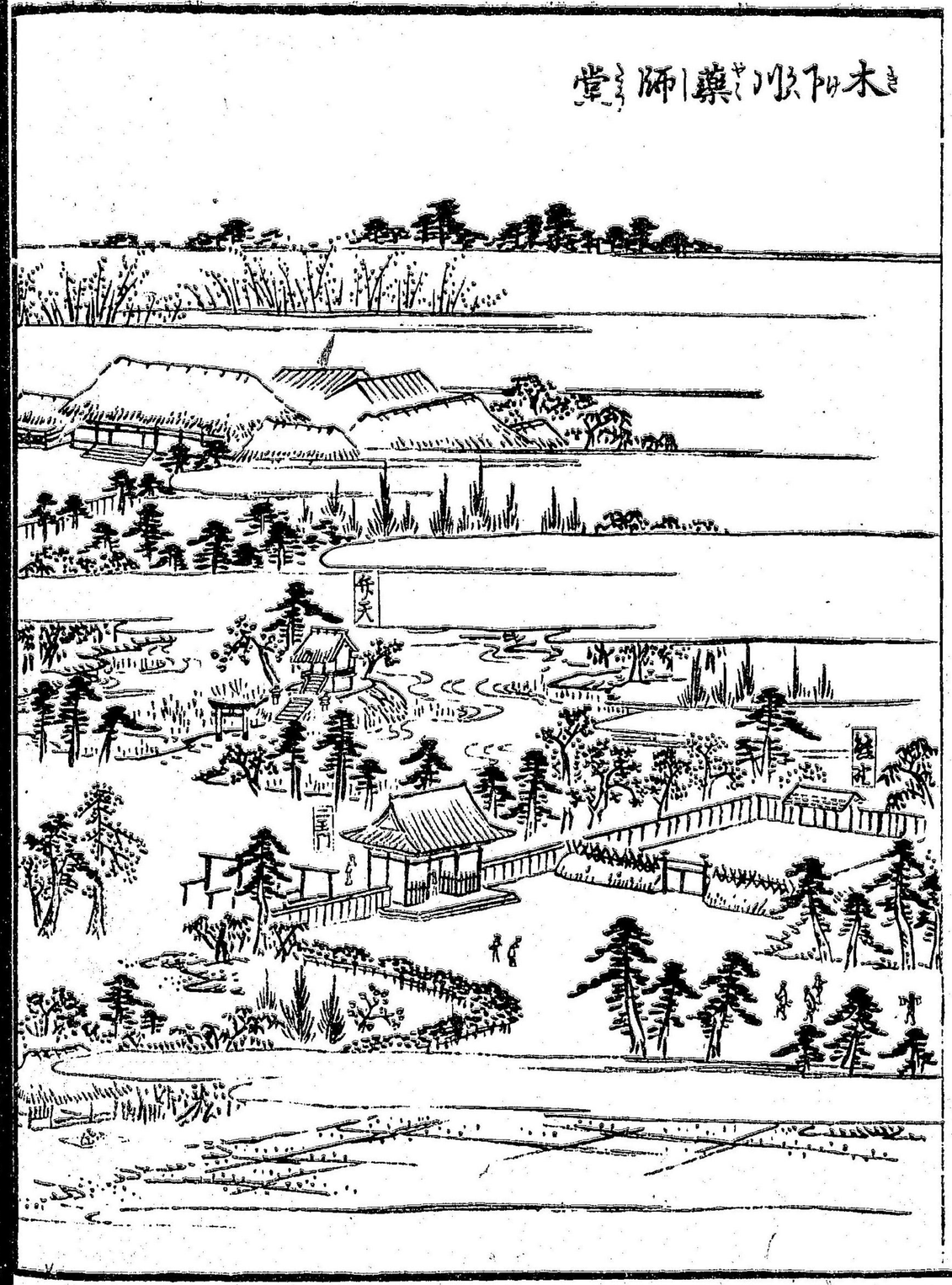
本尊薬師如来縁起

一巻　其文左の如し

青龍山薬師佛像縁起

原夫佛像者優填王慕佛而刻像初馬伽藍者須達

木叉地蔵 薬師堂



江戸名所記ふ
ぢ中へまり毎月
八日なくひふ
ホ三の朝ゆそ
うかす木尊
の御前ふ我焼の
あつら成ふい申る
人よりくすとあり
これと渉る今ハ
絶てなかや土人も
業くすとつくり

當不時官知語等力等曰宿山龍龍雲尋出靈留傳去識集汝息思
寺動放吏識唱言營獻今草以不能告青臨像淺被村必汝等而建
居院北及来翁是之供夜庵青動加青龍東彼草現里来等若還伽
既之覺冨而之我此耳夢漸龍垂護龍到北像寺益道此磬能爾蓋
而像大民建支之地覺或至至頭之曰庵忽傳一者俗營合至後如
告是師等寺曰願伐大人清今而莫吾所然教日多目練心心翁何
村也思傾於翁也木師告旦時聞令有拜起大有矣送若護歸語答
人此必財此聖師交告曰里時言不一佛瑞師白其天吾此請村曰
曰時靈戮聖者能荆村貴人有已祥言像雲所髮後際若此必民時
堂覺材力語也企新人人數龍龍自神而青造翁慈追遲地有曰緣
字大自于不翁造為曰寓輩燈形今龍青龍也来覺共歸亦感過未
未師刻時虚欲營靈我草捧奇隠以聞龍現言曰大深傳好應日熟
成或不庵師去我場欲庵珍瑞覺神之猶雲已東師信吾建也吾汝
雖時動中其告等則建子勝者大龍吾現中形北東誓語練我已且
然在明有人衆誓不寺等而其師為欲在覺隠有方首語若有得還
吾淺王尺也曰努亦於蓋玉此為護建贊大慈靈行自畢後西安去
志草像餘於後力空此餉問謂吉伽寺大師覺地化是凌時州靈於
在寺今靈此時村乎汝焉其乎徹藍於師潜大吾之靈空有之像是
弘或堂木台有人村等故故其即神此向出師安時感而善行自智
通時西時郡善亦人台我對夜名青神瑞寺便置磬滋西知未今止

布無佛乗尊故尊之像我像大天像是何智東靈是翁髮謂居附則
亂人下之處此曰白何遷應處而日明腰師當告日再是止像量金
奇家總耶所翁我如常到之耶語欲此見曰行曰佛刻也觀者之祇
香唯國於以容待雪唱武地大夢還時今像也如像藥其院傳生園
薫有郡是然儀像容佛州也師事野下不已大汝已師後自教也始
郁一今乎者心者眼名偶汝對智州野拜靈師所成佛大刻大肆焉
智草之翁我非久麝居然夫曰感告國像異俄念但像師等師下爾
喜庵地與奉常矣素在遂隨信喜別大腰不覺我未今思身所總来
而于也智特人汝而葛一佛知而耳慈者煩時欲琢青念藥造國佛
附時四及佛故所氣飾老意佛問大寺蓋復四利彫龍彫師也葛像
像此望從像對負象郡翁廣意曰師有由彫更益像山刻佛初飾伽
於地瞻者者曰佛超木其智非然默釋之乃也東腰之一像延郡蓋
翁震眺東正願像凡下名曰凡則然廣也止便國其本佛安暦青徧
而動唯入是我當相川唱諧所生而智而因起之夜尊像置七龍満
智衆見荒生欲安見野翁謹測身知者大之拝衆大是當之年山三
問雲茂原身一我欣年不隨只佛佛来師自像生師也化今於淨千
曰降草行佛見草然可知佛東也意在不以感明夢大益中叡光之
我垂曠數也老庵傾九其意州不附叡知錦數旦所師東堂山寺界
此瑞野里豈翁智懋十姓因自知於山便綉恭有刻彫國之創藥利
地花曽至輕之思唱鬚字負有安廣至到纏敬便佛刻以本一師益

所期未果不得以此明日當去他日再來耳又告弟子顯密兼學觀心二教其年三月忘其人積數百年一如昨日也淨光寺六月十五日住持沙門義純謹書

嘉曆二年夏六月十一日

本尊緣起曰延曆年間傳教大師東國化益の為敝止ふ於一藥師佛を彫刻し漸く數百の衆生を利益せんとする頃一夜此靈像大師の夢ふ告て曰く汝う念ふ所の如く我東國の衆生と利益せんとする明旦便あり我ふ従へと大師驚き覺ぬ然ふ明旦下野國大慈寺の廣智

其頃敝止ひりしう此日歸らんとし先大師ふ別と告んと來

ま謁をめふ於て大師佛意と悟ま靈夢の瑞と語り竟ふ甚

像腰と周刻せしめて錦綉と飾りて是と纏ひ廣智ふ附屬を

佛前佛像ふ半より上と拂ふ今の水下川の時ふ到る

明神翁依然として云く我靈像の到ると待ふ久しふしく我茅庵

ふ安ふへしと云云智喜んで彼像と翁ふ附一又此地ふ伽藍と建しの

と告翁云時緣いまして熟せり汝且還ま去ま依て廣智を此ふと

思ひ止ま鄉里ふ歸る剛後翁村民ふ語て云く後善知識ありて必

あふ來ま練若と營ん我今西州ふ赴くもの若歸ま來ふ遲

うんあま此語と信と云云畢ま空と凌と西ふ去まり村里の道俗

天際と見送ま步ま深信皆首を垂後巷覺大師東國化導の時

武州ふ到ま暫淺草寺の觀音堂ふ留ふふ一日白髮の翁來て

其名と唱翁と姓氏詳ふ今白髭
故ふ今

境色勝見菩薩聖衆赤色僧侶善友遂得數見大神感應多血

地殷重罪有重瑞至誠人全使不徹見光寺實是鎮護國家

都延自聞刻其二脇士及表十二百二十二院名曰淨光寺

二紀時遷世變體其總數見種到著問不悔同燒不頭為可備後錄指生刺乎源二合而

十二年浄光寺二十一世住持沙門義純謹書

嘉曆二年夏六月十一日

本尊緣起曰延曆年間傳教大師東國化益の為敝止ふ於一藥師佛を彫刻し漸く數百の衆生を利益せんとする頃一夜此靈像大師の夢ふ告て曰く汝う念ふ所の如く我東國の衆生と利益せんとする明旦便あり我ふ従へと大師驚き覺ぬ然ふ明旦下野國大慈寺の廣智

所期未果不得以此明日當去他日再來耳又告弟子顯密兼學觀心二教其年三月忘其人積數百年一如昨日也淨光寺六月十五日住持沙門義純謹書

嘉曆二年夏六月十一日

本尊緣起曰延曆年間傳教大師東國化益の為敝止ふ於一藥師佛を彫刻し漸く數百の衆生を利益せんとする頃一夜此靈像大師の夢ふ告て曰く汝う念ふ所の如く我東國の衆生と利益せんとする明旦便あり我ふ従へと大師驚き覺ぬ然ふ明旦下野國大慈寺の廣智

其頃敝止ひりしう此日歸らんとし先大師ふ別と告んと來

ま謁をめふ於て大師佛意と悟ま靈夢の瑞と語り竟ふ甚

像腰と周刻せしめて錦綉と飾りて是と纏ひ廣智ふ附屬を

佛前佛像ふ半より上と拂ふ今の水下川の時ふ到る

明神翁依然として云く我靈像の到ると待ふ久しふしく我茅庵

ふ安ふへしと云云智喜んで彼像と翁ふ附一又此地ふ伽藍と建しの

と告翁云時緣いまして熟せり汝且還ま去ま依て廣智を此ふと

思ひ止ま鄉里ふ歸る剛後翁村民ふ語て云く後善知識ありて必

あふ來ま練若と營ん我今西州ふ赴くもの若歸ま來ふ遲

うんあま此語と信と云云畢ま空と凌と西ふ去まり村里の道俗

天際と見送ま步ま深信皆首を垂後巷覺大師東國化導の時

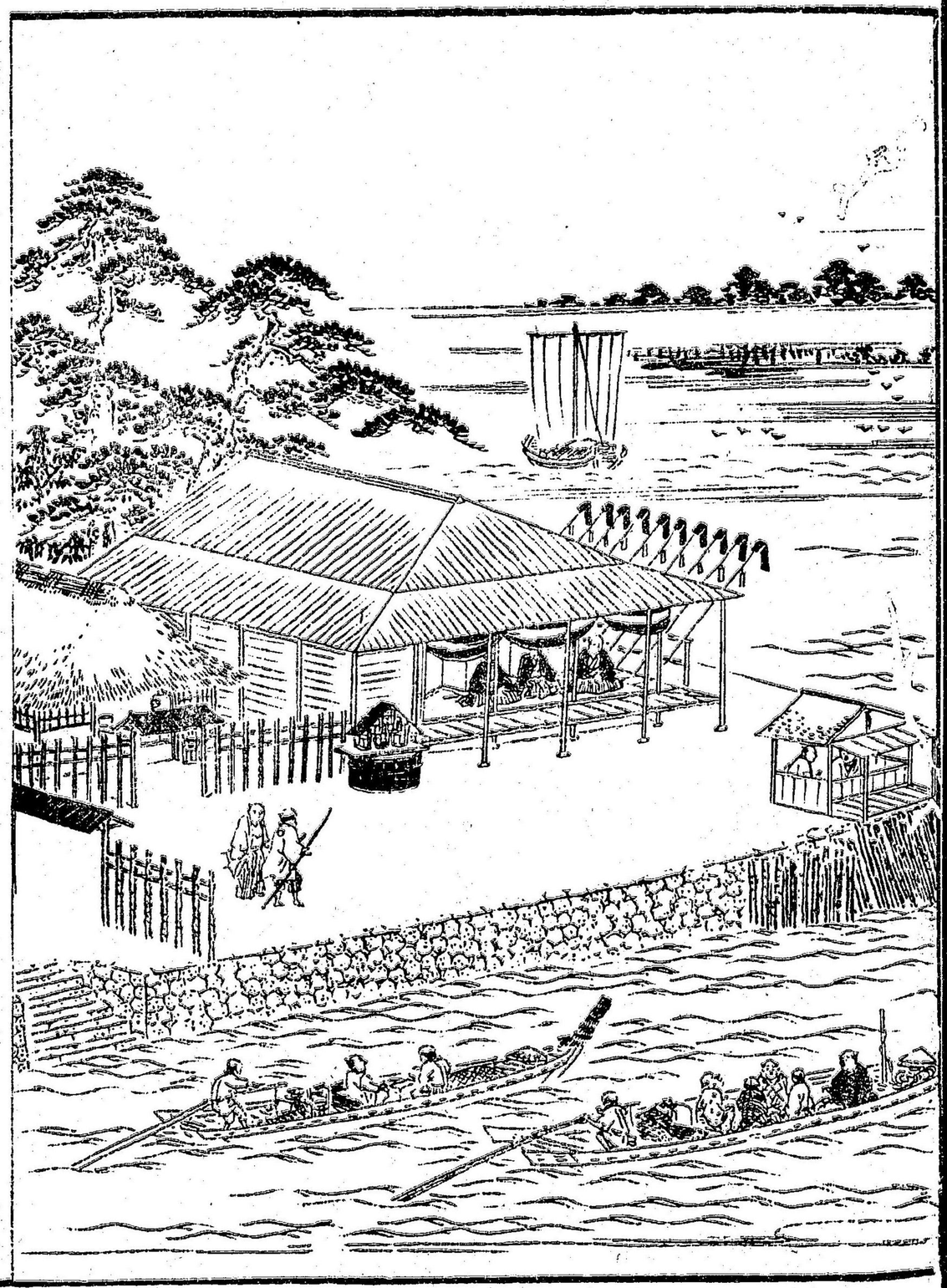
武州ふ到ま暫淺草寺の觀音堂ふ留ふふ一日白髮の翁來て

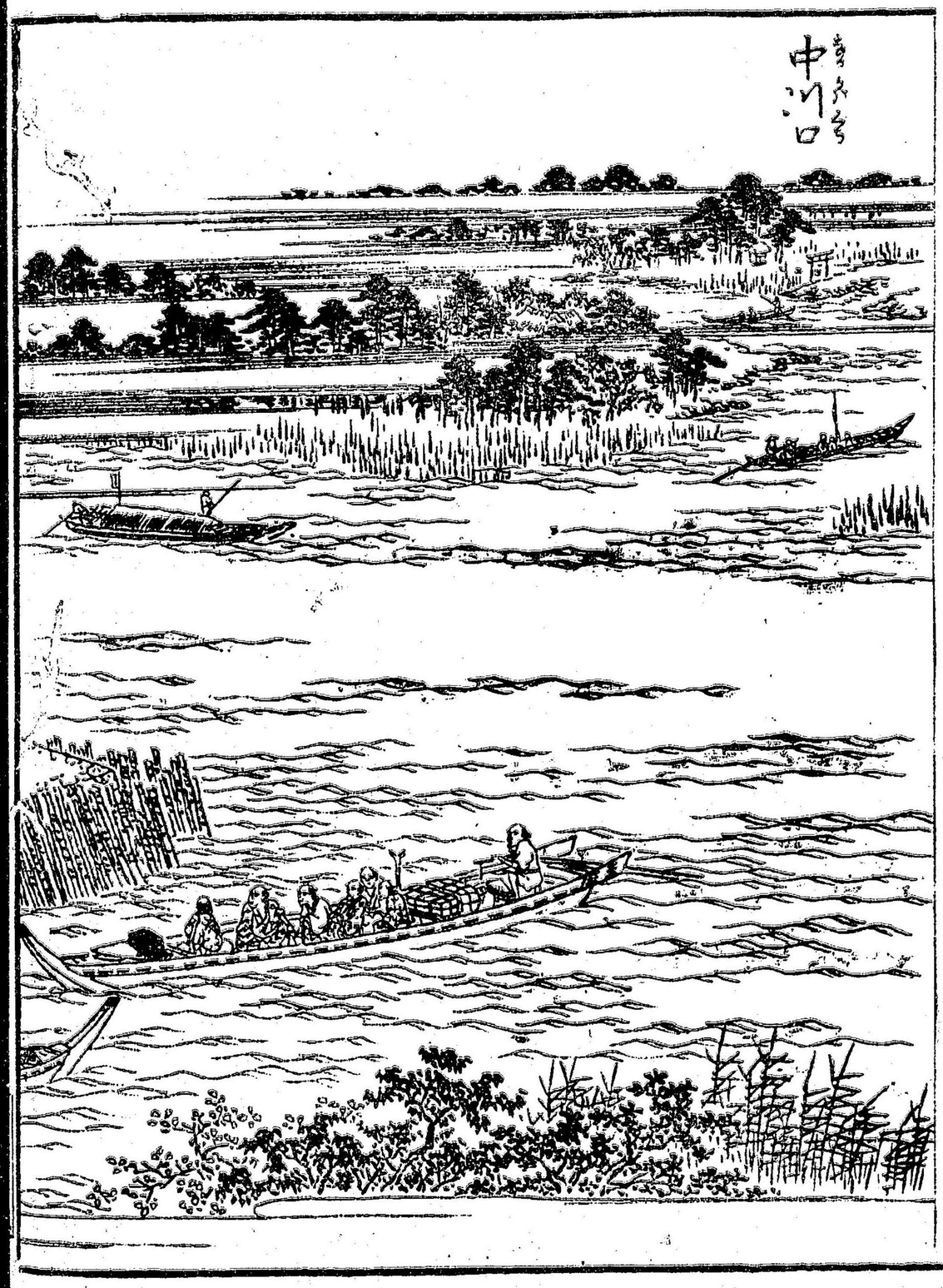
本下川薬師如来の
霊像ハ延暦年間
行教大師叡山に
在せーしとき
化益のため彫
造せーたまひ
ーしと伝
此本尊の是
ぞ知ることなき
竟にその像
様を刻ーひ
ーし錦繍
りそこんと
握ひ下野國大慈寺の
慶智といふ沙門の
来ーまゐりーしとき
付属ありーしハ本
尊ハ有像の比なる
ゆゑ本下川に安置
る一奉かーみ

浄光寺縁起は
深うり

大師ホ告て云く此所より東北ヨ靈地あり藥師乃靈像伏
安もといひ畢て後生ゐ方を失ふ大師東北を望ホ忽然として
瑞雲起を中ホ青龍現を依て奇異の思ひをなし猶ホ寺を出て
尋元ムもホ果して藥師佛の靈像あり此時村人等集て來り
前の唱詞ら言を告大師をして其人ありと称し終ホ合郡宿吏
及ひ富民等財を傾けく寺院を建立せんとも則弟子慶寛ヨ
此地を附屬ありしゝ慶寛嘗構の志を励し貞觀二年の春ヨ
至て諸堂落成をまゐに於て慈覺大師を開山と称し古乃
瑞ホ因く山を青龍と号を
朝廷其瑞應を聞ゐひ田園百畝
を賜ひ永寺供ヨ充ヨ後恵心僧都二脇士及ひ十二神将ホの
像を影刻ありて佛前ホ安せる又慶寛十二大願を表して
十二の衆徒を置十二院と合せて淨光寺と号くるもの
當寺ハ草創より已降九百四十有餘年を経る古刹ありく
本尊ハ光を一天ホ耀ー十二大願の衆徒ハ麓を山中ホ並へ
日夜の勤行怠慢なく法燈日を越く赫くしゝ
闘爭國々ホ起を天下大ホ乱まる頃堂宇ハ破却ー寺領ハ
没収せらるヨ又ハ兵燹ホ罹て焦土とゐり殘ヨ止る住坊も
なく唯本尊のミ草堂の中ホ在せゐホ天正の末四海昌平ヨ
歸ーまりー後閑十九年住僧良完慈誠して竟ヨ某師堂
頽の朱章を煬りゐ志うのミ
怠ることなく本尊の靈驗いよ〳〵著ーくゐり

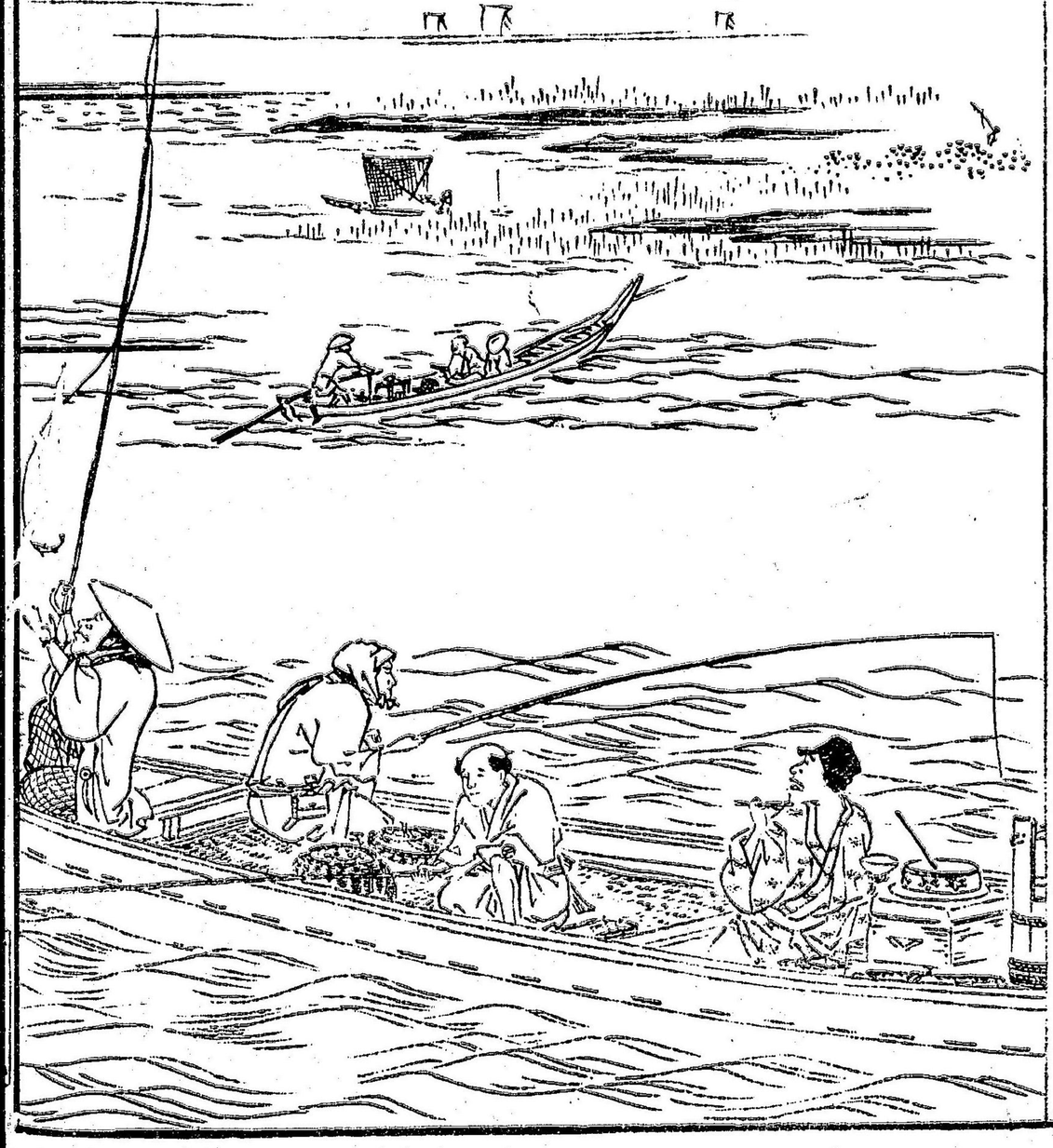
中川　隅田川と利根川の間ホ夾まて流る本川の号あり
とゐへ莖川の分流熊谷の辺ゐりまて遠く埼玉と足立
西郡の合ヨ流を利根川の分流も川俣よりまーまり
二水猿ら俣の辺ホて合ー飯塚大谷亀有新宿等の地ホ添て青
戸與戸平井木下川及ひ小村井逆井と経て海ホ入

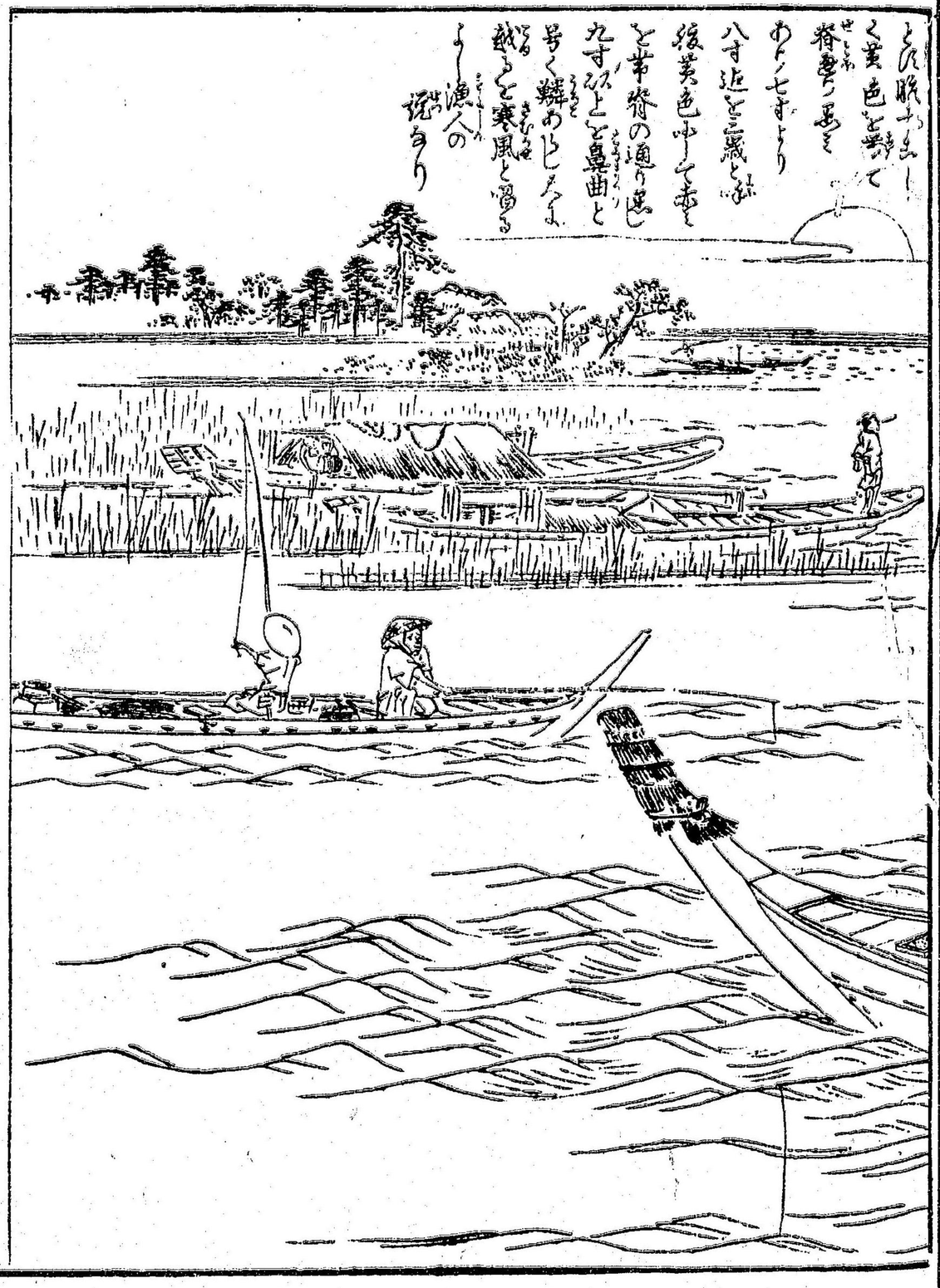




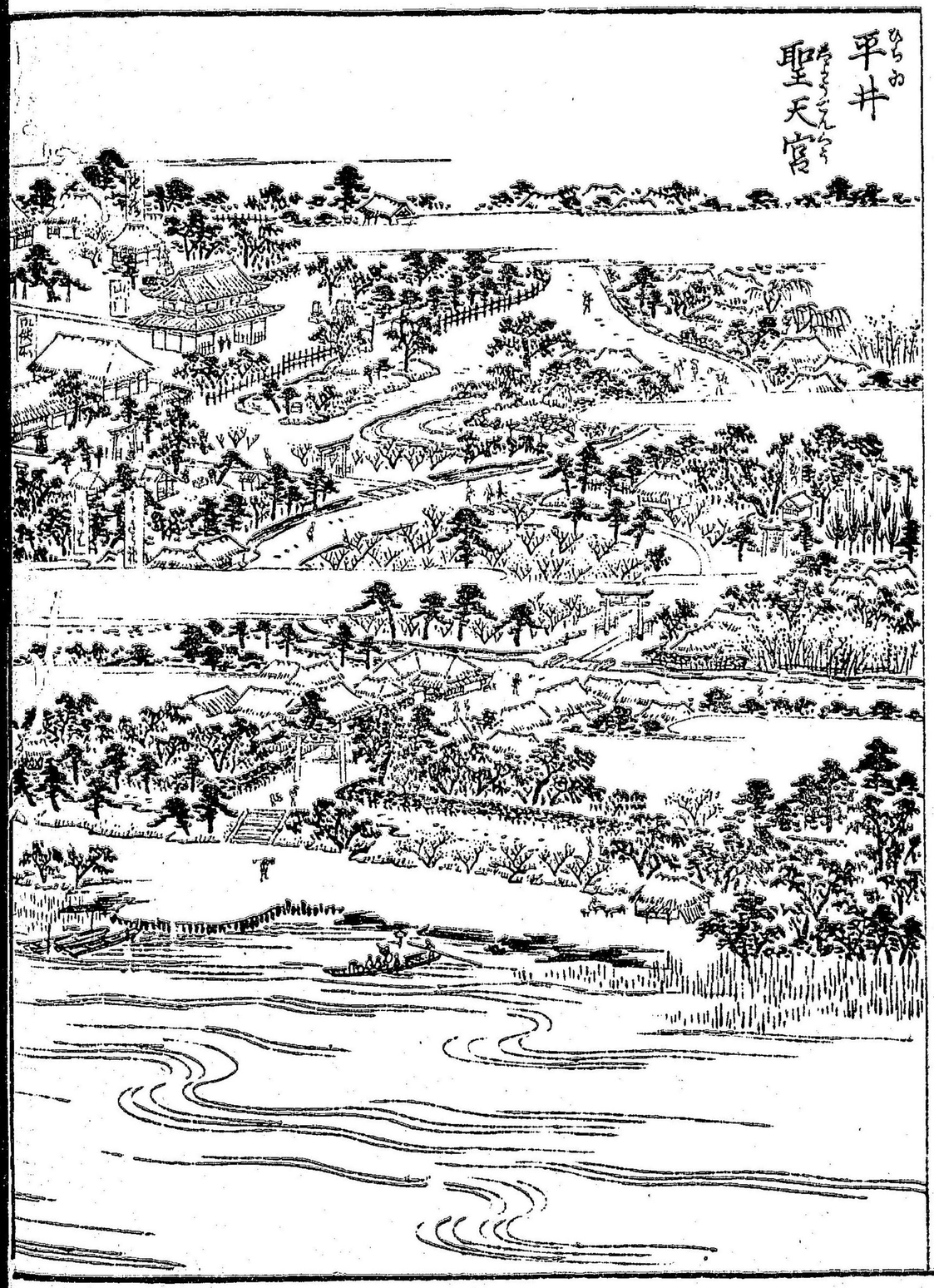
中川釣鱚

春鱚ハ三月の末より
四月小入く盛る春
釣と云ハ鬼文のし南総
伝ての船頭仁蔵と
云人是ハ継合岩波流
とのみハ則ち人より始
りて後春鱚
を釣る事世に勝れ
しと云神鱚ハ八月の末
より九月
とハ絶ても十月まで
寒気ゆるされ
ず名ある川釣小筆自
漁人海を産する銭白
鱚と呼川あるを青
鱚と喝少し鱚ハ大小
の差あり小歳ハ後
白く五
六歳





とハ脱ちく黄色を帯て
脊黒き
ゆゑ七まより
八寸迄を二歳と称
後黄色中て赤
を帯脊の通り悪
ずと云ふ
号く鱚あれど
越ると寒風と
ふる
漁人の
説なり



平井聖天宮

祈り上と古利根川水戸黄門光圀公水府入れの此中川乃水上ふして一の盛土ほ中川と命せしそのまゝ

中川やほとゝぎすもしてもはやうの月　嵐雪

立石　立石村五方山南藏院とゝゐる真言宗の寺境内より地上へ顕まゝる石縦よ壹丈もゝり土人相傳へて石根地中ふ入る其際まゝとゝゐ小松まる鞍馬石ふ似ゝり此石寒氣を帯まゝかゝと欠損まゝさんとも春暖の氣を得ゝ時ハ又元の如ゝと云ゝ古ゝ紫若遊ゝ四五箇村の名ゝゐゝ分ゝゐり撫ハ此村のゝゝ立石ゝゐゝより撫ハ此村のゝゝ立石ゝゐゝより

熊野權現祠　同境内艮の隅ふゐり今旧地ゝ失ふ左ふ鎌座乃年歴等ゝ詳ふせゝゐゝ神躰ハ一箇の靈石ゝゐゝ長二尺八寸本ゝて二尺ゐり未ゝ六寸ゐまゝ其餘武刀練馬の石神井村石神井社ふ多摩郡阿佐ゝ谷神明宮の神躰乃靈石ふ似ゝゐゝ

其形相似ゝり

日照山普賢寺　上十葉村ゝ

如来ハ佛工春日の作なり

巍ゝゝゝ廣大ゝゝゝ此辺ふ普賢寺村と号ゝ地名ゝゐゝ當寺食邑の旧跡ゝゐゝ

いくつ人の墳墓あり

櫻ゝ葛西三郎清重の氏族ゝ尉義盛兵を起ゝゝ時ゝ義時の軍ふ加ゝゐゝ此類ひのゝゝ尤天工のゝゝ世ゝ石劍ゝ称ゝゐゝもの是なり

真光山善通寺　逆井渡口ゝり八九町東の方東小松川村ふゐり

一向宗西本願寺ゝ属ゝゐり本尊阿弥陀如来ハ衆迎の像ゝゐゝ

相傳ふ往古千葉介太郎宗胤の守本尊ゝゐゝ宗胤没落の後ゝ家臣秋元刑部左衛門尉胤次と云者是ゝ修ゝゝ歳

立石
南蔵院
熊野祠

周を歴て後親鸞上人
亂次ゟ家ゟ止宿せらるゝ頃
亂次上人の宗化ゟ帰一
永正年間兵火ゟ罹て堂宇悉く焦土とかしと
持退て悉ゟ天下承平の時ゟ至り終ゟ一宇と剏く
善通寺と号くとぞ
阿弥陀如来画像一幅 中将姫製 余平存
八日より同十日迄此像と掛と諸人
賤難ゟ逢とぞ威霊のすありて失り
十字名號一幅 親鸞上人の真筆
此書号と書てらへらるゝ
醫王山妙音寺 東一ノ江村ゟ
上人開創まる而の精舎ありり真言宗ゟして建久元年秀栄
の薬師如来ゟ立像ゟして佛工春日の彫造ありと云傳ゟ法右銘
安房守某ある人の念持佛ゟ
此宮ゟ堂前池の中島ゟありて寺記ゟ寶治元年丁未勧請ゟと云

秋元ノ知行ノ左遷ノ子孫今ゟ此村ゟ住ス
門徒ゟ
物地ゟ縁ゟして浄土ノ
織ありり毎年四月

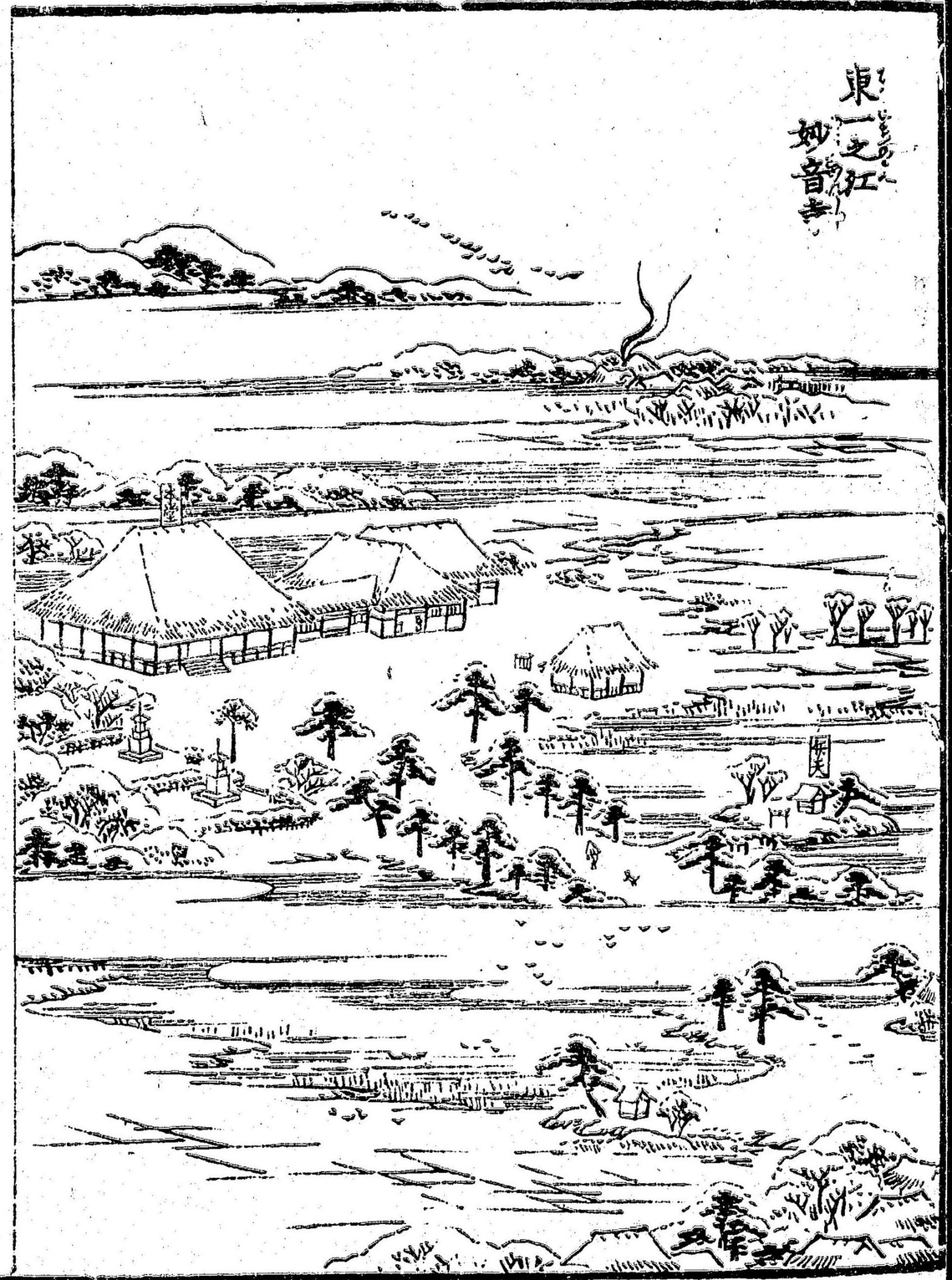
賓頭盧尊者像

堂中ホ安置セ寺僧ガ云ヘテ
佛工春日ノ作ナリトゾ
ソノ一尺ホドナリ栴木造リ
テセ家貌甚異相アリ

覚山妙勝寺　西二ノ江村古川ノ通リヨリ日蓮宗ニシテ中山
ノ一鶏寺葛西ノ觸頭ナリ弘安年間　或ハ徳治二年　日尚上人乃
草創ニテ宗祖大士ノ像ハ日祐上人ノ作ナリ　日祐上人ハ中山ノ第
三世ニテ延元年間
宗法盛ンナリシ頃一夜宗祖上人微妙ノ音声ヲ以テ読経マシマスト云ヘ
ル中感得ノ霊像ト摸造シテ開眼供養シ日尚上人ホ附属アリ則堂坐ホ
移シ置ル云ヘリ此人ハ世俗ニ読経ノ高祖大士ト称シ奉ル毎ホ中山累世貫主
ハ必ラズ此ノ像ヲ拝シ後ニ修飾ヲ加ヘラルホノ法灯相続アリ
水神宮　日尚上人ハ当寺開創ノ主ホシテ平氏ノ末裔ナリト云ヘリ安
元七年甲申或ハ正應二年乙酉十四歳ノ夏ノ頃ナリシカ或ル年ノ如月ノ
或ル日ノ事ナリシカ或ル年ノ如月ノ或ル日ノ事ナリシカ或ル年ノ如月ノ
漁人五郎何某ト云ヘル者ホ洞舟ヲ操リテ平氏ノ末裔ナリト云ヘル
ホ中山ノ日高上人ト称シテ其生来ト聞エ自通家ノ某ノ
侍ホ草庵ヲ結ビテ居ラレシ上人ニ帰依シテ此地ニ
廣宣流布ノ志頻リナリ此水神宮ハ日尚上人初メ洞舟ホ乗リ此海上ホ
漂泊アリシ頃深ク水神ホ祈誓シテ波浪ノ難ヲ逃レ一報恩ノタメ此ホ
日ル上人ノ遺眼トシテ後ニ一社ヲ建立シテ祭リシ云ヘリ此ノ法味トシテ
ツラヌキ周ヘリ

葛西六郎墳墓

葛西上ホホ村
晋賢ルノ墳内
ユヘリ



龍亀山浄興寺　清泰院と号し上今井村渡口より二丁ばかり西北の方にあり浄土宗にして縁山の属なり鎌倉光明寺の末寺なり

記主禅師良忠當寺を草創せし中興は増蓮社頓誉上人源清和尚と号す本尊は阿弥陀如来なり

東土産　或人安房の清澄と一見せよといへり（愚案ずるに此の説の誤りなり）並びに江戸の説の誤りなり一宿して角田川の渡舟にて江戸に赴く日暮れ路遠し（愚按ずるに此の句の誤りなり）

素拙を経て波の浦みうらひてかくて住一里ばかりにして深川の寺浄興寺と云ふ寺に着く

ありしとなり

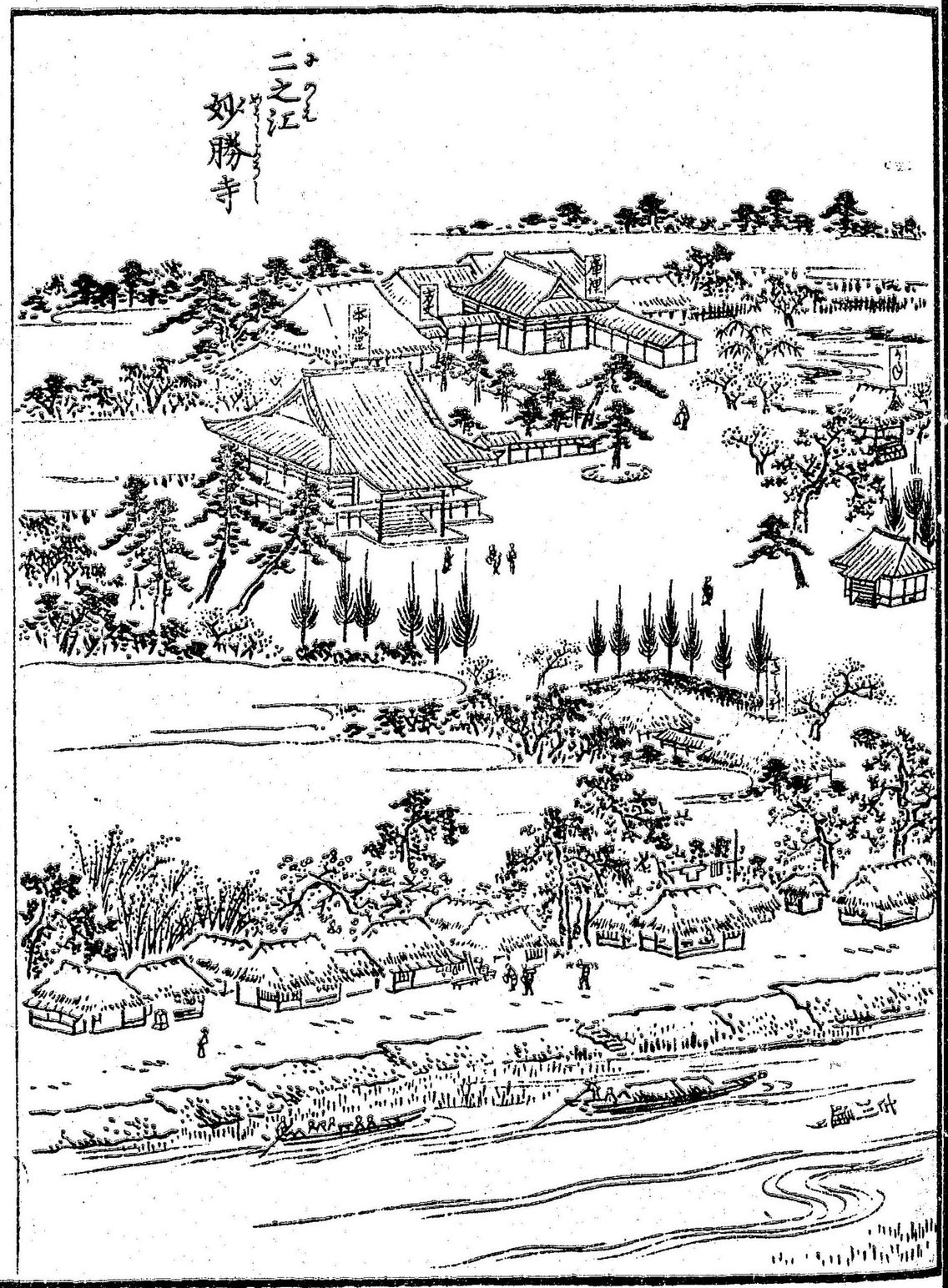
富士の根をそらにぬきのお里より

宗長

方よの西ぬきーひうひきくそのりみえ（愚按ずるに此の句の誤りなり）世よ宗祇法師の紀行とまる八堰ありへーまつまのつとそ宗長の紀行とまる八堰ありへー宗祇終焉記ありひ扶桑隠逸伝等の曲

宗祇法師は文亀二年七月つくりおもひ記の書ふ宗祇法師八文亀二年七月つくりおもひ記の書ふ宗祇法師八文亀二年七月つくりおもひ記の書ふ宗祇法師八

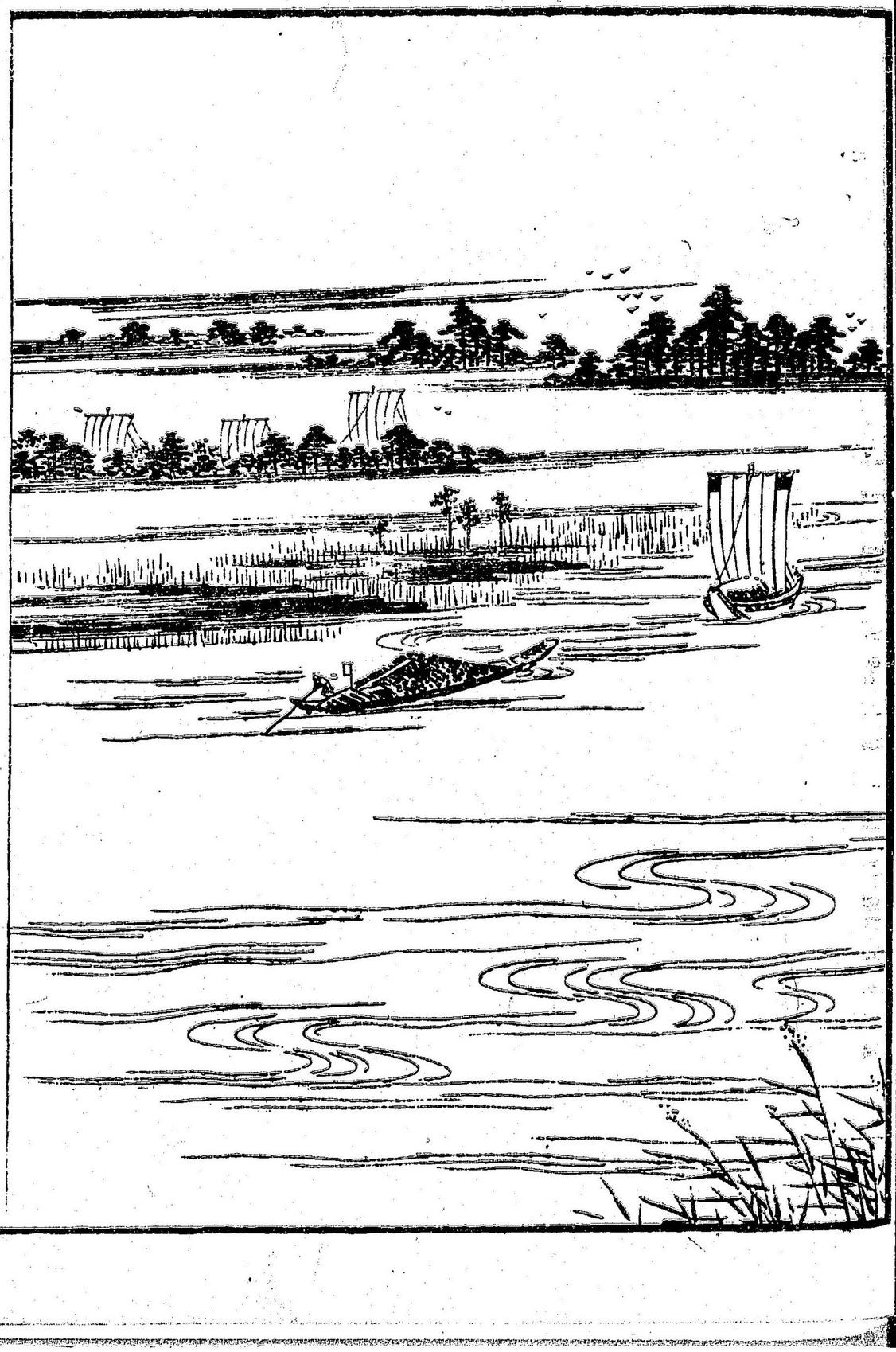
二之江
妙勝寺



二の江より今井舟橋桑山のわたり小倉山より海苔と世ふ葛西海苔と称も本草ふ所謂紫菜の類中ゝ淺草海苔より異あり。

今井の津頭

紫屋軒宗長永正六年の紀行東土産に隅田川の河舟よそ葛西の舟のうちと半日をかり設芦をおのき今井と云津より下て浄土門の寺浄興寺を立寄てとあれいそぐ此津のありさまなり



今井
浄興寺
琴弾松

東土産
つゆ士よ根
ハ
きゝかゝる
雪乃
十里
北条
氏康

方丈の西ふさ
ゐひ雪ふりかゝるもとも
ゆゑ
宗長

和哥を詠せる是より淺琴ひき松と号せるそん

武蔵野紀行
寺門ふるき物の荘浄興寺のせき年八十あまりなれハ洲をゝゝり宿をゝゝまれなれハ洲入風ひゝゝゝふく松風入夢とゝゝを
ありなんそ

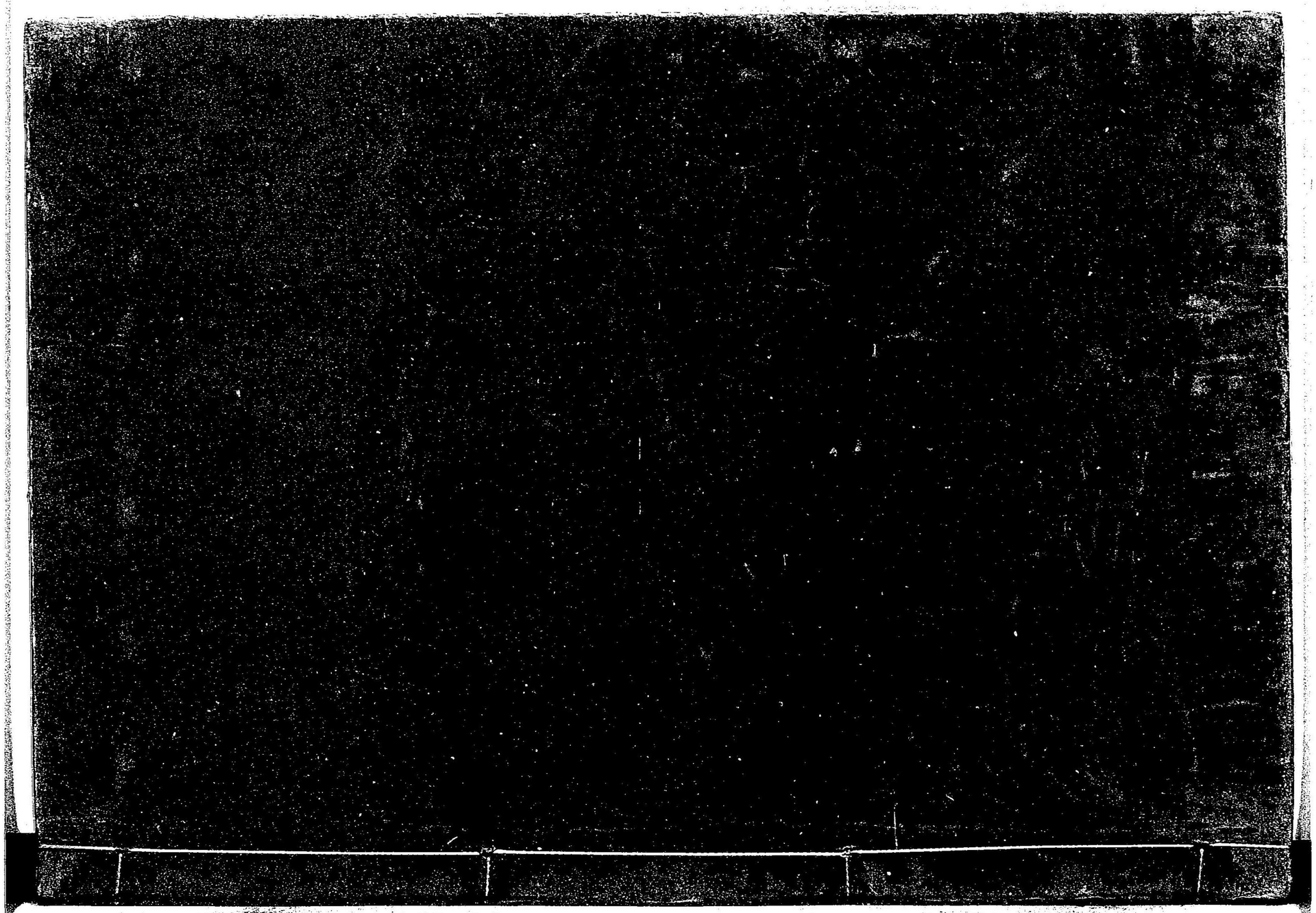
松風の吹をさそひよ琴ひき松
北条氏康

抜よ民康紀行の記せし浄興寺を世人木下川の浄光寺よ思ひあやまれる
既ふ久し寺号ハ似たれとも文字と光との違ひあり民康宗長の紀
共ふそうの文字浄興ふ作下川の浄光寺ハ若覚大師開創の精舎ゆゑ天台止観の法燈赫
當寺ハ記主禅師の開基ゆゑ旧より浄業の仏刹ゆゑ庭前琴弾松と称する
古松もあり又東土産よ述るゝゝ芙蓉の峯ふ相對
眺望ゝる不宗長ゝ句意よたゝゝ然ゝ時ハ此ゝゝ川の紀行を明證とゝり

天川山妙福寺　下鎌田村よあり　浄興寺の北二町ゆを隔て浄土
宗ゆゝゝ上今井村金蔵寺ゝ属を中興開山ハ徳誉岌公和尚と号
本尊ハ阿弥陀如来なり
親鸞上人御影堂　本堂の前左の方よあり　相伝ふ昔親鸞上人東國遊化の頃
上人清劔の祈念ありしよハ救日の間雨降ゝ百穀登るゝ民上人ゝふ止りのゝ
三年凝浴の願自躰の肖像を造りゝゝゝ残ゝ置ゝゝりゝ無歳四月八日より

天文十五年九秋小田原の
北條左京太夫氏康おそし
野小鷹狩の時葛西の
浄興寺に一夜のやどりを
もとめられ松風入琴と
いふる和哥を題
して詠せしまゝ
松風乃
吹こゑも
きけ
武蔵野
紀利之

北條氏康

同十日迎佛龕を開き親鸞上人の
御影を拜し奉り因道俗群集す
一の翠懸松 同一傍にあり 曰樹ハ
太子堂 本堂の敵右の方にあり
御影堂と相對せり 聖徳太子の
影像を安置し太子自ら作らせ給ふと云伝へ 毎歳二月廿一日 祭禮あり
帝釋天王 栄又村経栄山題経寺に安置し 當寺ハ寛永
年間の草創なり
縁起云當寺第九世日敬師在住の頃堂宇大に破壊し師
深く是を歎き普く四方に行乞して再興の志を励し終に其
堂舎を造改んとする時梁上より此板下るを得り旧當寺よ
高祖大士手刻の祈禱本尊と称するものなり 長二尺弄
此時に至りて空 則本尊と出現す 幅一尺餘
厚サ五分許ある刻板なり 片面八軀半肉彫の首題おゝひ左右に両ある四菩薩又痕跡
消滅そのの数字を刻す 其下に五月日とあり大士の手ある印せり又片面ハ
帝釋天王の影像 左の手に剱を持ち右の手ハ怒拳の相を現し
是除病延寿の本尊悪魔降伏のる容なり 信敬の輩ハ是を印刷して与へ默者
あるべからず 末代の本尊となり 往古ハ櫛の四天王寺より初て帝釋天降臨あり
庚申の日より當寺の板本出現も又庚申にあるべからず因縁あるべし此日を

国立国会図書館